

# 福岡市域における 8～9世紀集落の変貌とその背景

The Transformation of Eighth-Ninth Century Settlements in Fukuoka City  
(Abstract)

坂上康俊

SAKAUE Yasutoshi

はじめに

①福岡市内の遺跡で検出される住居址・生産遺構の分布と消長

②麦野・雑餉隈・南八幡遺跡

③井相田遺跡・仲島遺跡

④立花寺B遺跡・雀居遺跡・下月隈C遺跡

⑤高子内親王家領の状況

おわりに

## 【論文要旨】

畿内、東国、北部九州の古代集落は、8世紀の安定期を終えた後に、それぞれ異なった展開をたどる。すなわち、畿内では9世紀に入ると不安定化し、東国では10世紀に入ってから衰退するのに対し、北部九州では9世紀初頭に衰退してしまうのである。しかし、衰退したり不安定化したりする原因については、あまりはっきりとしていない。集落の衰退・消滅の背景を探るには、まずは個々の遺跡の景観を復原していくことから始めるしかあるまい。

本稿では、福岡市教育委員会が刊行した発掘調査報告書の悉皆調査を踏まえて、福岡平野の中心部を貫流する御笠川左岸の低位段丘上に、8世紀初頭から末まで稠密な集落群が営まれたことを確認した上で、その住人たちの食料生産の基盤であった可能性がある御笠川左岸の低湿地・微高地、及び右岸の低湿地・微高地上の水田や集落の展開を追ってみた。その結果、8世紀末から9世紀初頭に掛けて起こった大洪水によって水田面が広範に埋没したことが周辺住民の生産基盤を破壊し、これが原因となって集落が途絶えたのではないかと考えた。

御笠川右岸には延暦年間に設定された観世音寺の荘園があったが、同じ場所が勅旨田とされてしまったのは、そこが洪水によって埋没してしまい、荒廃してしまったためであろう。この水田面は厚い洪水砂によって一旦埋められ、再開発は容易ではなかった。現地は貞観年間でも、ところどころに新開田や再開発田が点在する景観だったことが文献史料から窺えるのである。

このように、福岡市の中心部分にあった古代集落に関しては、その衰退の大きな原因が水害という自然災害にあったことを、発掘調査の結果と文献史料とを総合して明らかにすることができ、その復旧が容易ではない状況も、関連史料によって説明することができた。

【キーワード】 古代集落、洪水、福岡平野、条里制、勅旨田

## はじめに

日本古代の集落遺跡の存続期間をめぐっては、かつて以下のように説明されていた。すなわち、畿内、東国、北部九州の古代集落は、8世紀の安定期を終えた後に、それぞれ異なった展開をたどり、畿内では9世紀に入ると不安定化し、東国、あるいは東日本では10世紀に入って衰退するの<sup>(1)</sup>に対し、北部九州では9世紀初頭に衰退してしまう、と。地域間に生じたズレについては、筆者も早い段階で指摘しておいたが、どの地域についても、衰退したり不安定化したりする原因については、明確には説明されていなかったし、筆者も北部九州について論理的な可能性を指摘することしかできなかった。<sup>(2)</sup><sup>(3)</sup><sup>(4)</sup><sup>(5)</sup>

その後筆者は、科学研究費補助金・基盤研究(C)「日本における古代中世移行期村落の構造と展開」(JSPS25370781 2013～2017年度)をいただき、竹井良介氏(当時九州大学大学院博士課程在学・日本史学)の協力を得て、福岡市教育委員会が刊行した市内の発掘調査報告書の悉皆調査を行い、集落遺跡(具体的には建物遺構、水田跡や窯跡などの生産遺構)の検出を試みたが、福岡市域において先に述べた北部九州の大勢を再確認することになった。

しかし、北東北地方のように、城柵との関係で地域的な偏差を含み、立地も変化しながら、9世紀に一旦減少・縮小した竪穴建物・集落が、9世紀末以降10世紀前半をピークに激増・拡大に転じ、その後、10世紀後半から11世紀前半にかけて、所謂「防御性(区画・囲郭)集落」の形で集落が展開していくという事例や、長野市の南宮遺跡のように、9世紀以降、特に10世紀において、南長野運動公園の敷地の発掘という大規模調査の結果ではあるにしても、1,000軒を超えるという爆発的な集落の展開と急激な衰退を見せた事例も<sup>(6)</sup>見いだされており、全国的に、あるいは地域を分けて<sup>(7)</sup>概括的に論じるには、まだまだ事例収集が必要で、今は個々の集落の景観の推移を復原しつつ、その衰退・消滅の原因・背景を個別に検討していくことが必要な段階であるように思われる。そこで今回の共同研究「北と南からみた古代の列島社会～列島諸地域の交流・形成と環境変動～」への参加を機会に、福岡市域における古代の集落の消長とその背景について、あらためて検討してみることにした。

福岡市内の奈良平安時代の集落遺跡については、市の教育委員会によって刊行された1,300冊を超える報告書の多くで触れられており、事例研究として取りあげるには十分なデータ量と言える。そこでまず第1節では、竹井氏によってまとめられた3世紀から中世に至るまでの建物跡及び生産遺構の検出年表、およびこれを地図に落としたものを示して、集落の消長の大勢を概観し、続く第2節では、福岡平野の中心部を貫通する御笠川の左岸の低位段丘・緩傾斜面に位置し、8世紀初頭から爆発的に集落が展開しながら8世紀末には一旦集落が途絶える<sup>ぎつしょうのくま</sup>麦野・雑餉隈・南八幡遺跡を取りあげ、第3節では、同じく御笠川左岸ながらより低位に位置する<sup>いそうだ</sup>井相田・仲島遺跡を、そして第4節では、御笠川を挟んでこれらと向かい合う<sup>りゅうげじ</sup>立花寺・<sup>ささい</sup>雀居・<sup>しもつきぐま</sup>下月隈遺跡を取りあげ、それぞれの遺跡についての調査報告書が述べる年代観を紹介・検討する。幸いにも、雀居遺跡のあたりは、貞観年間に観世音寺と所領争いを展開した内蔵察領(旧高子内親王家領)博太荘の所在地なので、第5節では考古学的な調査成果と文献史料とを突き合わせて、8世紀末～9世紀前半の御笠川右岸の

景観を考えたい。こうした検討を通じて、8～9世紀の福岡平野中心部（御笠川両岸）の景観の推移とその背景について素描を試みようと思う。

## ①……………福岡市内の遺跡で検出される住居址・生産遺構の分布と消長

次頁以下に掲げた表1は、福岡市教育委員会による発掘調査報告書の中に記されている住居址、及び水田や窯跡、製鉄遺跡などの生産遺構を、報告書に記してある年代観に従って表示したものである。こういった表示法は、遺跡の継続期間（消長）を示すのにこれまでもよく用いられてきており、<sup>(8)</sup>確かにこの表を見ただけでも福岡市内の住居址が8世紀末・9世紀初頭に一挙に減少しているらしいことが分かる。

ただ、こういった表で集落の継続期間を示そうとすると、以下のような問題点を含んでしまうことになりがちである。

- ①住居址の年代観は、多くの場合そこで出土した土器の編年（年代観）と出土状況とに依拠している<sup>(9)</sup>ので、土器の編年次第では長いスパンが与えられ、たとえ一棟の住居址しか検出されなくても、長期にわたって集落が営まれていたかに表されてしまう。
- ②土器の編年の研究の進展に従って、年代観に違いが出てくることは致し方ないが、普通は次第に細かく時期区分されていくため、古い報告書ほど住居址の存続期間が見かけ上長く表されてしまう。
- ③発掘面積はもちろん、住居址の稠密さ、及び集落としての規模については表示されない<sup>(9)</sup>ので、ただちに景観の復原に用いるのは危険である。
- ④同じ遺跡の中の調査でも、年度ごとの調査・報告担当者によって土器の年代観、層序の解釈が異なる<sup>(10)</sup>ことがあり、実際にはこういった表は、ある程度武断的に作らざるを得ないところがある。

更に根本的な問題として、8～9世紀は、地域によって多少の違いはあるものの、一般の人々の住居が竪穴住居から掘立柱建物に変化しつつある時期であり、竪穴住居より掘立柱建物の方が、住居址としての復原や建物の前後関係の設定、時期比定に困難が伴うことが挙げられる。また、菅江真澄がスケッチを残し、実際に胡桃館遺跡で発掘されたような土台建物<sup>(10)</sup>になると、検出そのものも難しいという問題がある。

しかし、たとえば福岡市の箱崎遺跡では、古墳時代の後の数世紀にわたる空白期<sup>(11)</sup>の後、10世紀頃からの柱穴・土坑や井戸・土器などによる生活痕の把握や時期比定が試みられており、人々がそこを生活の場としていたかどうかの判定は十分に可能で、福岡市内の中世集落を編年的に総合することも既になされている<sup>(12)</sup>。従って、生活痕が見えないことの原因を住居の形態の変化による検出の困難に帰すことは、直ちには出来ないだろう。なお、土台建物については、胡桃館以外の検出事例が無いのでなんとも言えないが、生活痕が断絶する状況を検討することを通じて、この種の建物の広範な存在を想定する必要は減殺されるもの<sup>(12)</sup>と考える。

表1 福岡市内の集落遺跡の消長(1)

		住居・建物跡が存在			水田跡が存在			窯跡が存在			製鉄遺跡が存在																					
地域	遺跡名	3世紀			4世紀			5世紀			6世紀			7世紀			8世紀			9世紀			10世紀			11世紀			12世紀			中世以降
		前	中	後	前	中	後	前	中	後	前	中	後	前	中	後	前	中	後	前	中	後	前	中	後	前	中	後				
福岡市東区	海の中道遺跡																															
福岡市東区	和白遺跡群(上和白地区)																															
福岡市東区	鹿原遺跡																															
福岡市東区	三吉遺跡群																															
福岡市東区	三吉永清遺跡																															
福岡市東区	香椎A遺跡																															
福岡市東区	香椎B遺跡																															
福岡市東区	清田部木原遺跡																															
福岡市東区	清田・水ヶ元遺跡																															
福岡市東区	多々良遺跡																															
福岡市東区	清田遺跡																															
福岡市東区	多々良込田遺跡																															
福岡市東区	箱崎遺跡																															
福岡市博多区	百塚本町遺跡																															
福岡市博多区	百塚祝遺跡																															
福岡市博多区	百塚遺跡群																															
福岡市博多区	百塚遺跡群																															
福岡市博多区	博多遺跡群																															
福岡市博多区	博多遺跡群																															
福岡市博多区	博多遺跡群																															
福岡市博多区	博多遺跡群																															
福岡市博多区	博多遺跡群																															
福岡市博多区	博多遺跡群																															
福岡市博多区	博多遺跡群																															
福岡市博多区	博多遺跡群																															
福岡市博多区	博多遺跡群																															
福岡市博多区	博多遺跡群																															
福岡市博多区	博多遺跡群																															
福岡市博多区	博多遺跡群																															
福岡市博多区	博多遺跡群																															
福岡市博多区	博多遺跡群																															
福岡市博多区	博多遺跡群																															
福岡市博多区	博多遺跡群																															
福岡市博多区	博多遺跡群																															
福岡市博多区	博多遺跡群																															
福岡市博多区	博多遺跡群																															
福岡市博多区	博多遺跡群																															
福岡市博多区	博多遺跡群																															
福岡市博多区	博多遺跡群																															
福岡市博多区	博多遺跡群																					</										

上掲の表には、以上に述べたような問題が含まれることを念頭に置かなければならないわけであるが、それでもなお先述したように8世紀末・9世紀初頭が福岡平野の集落景観にとって大きな変化の時期だったのではないかという見通しを得ることはできるだろう。

しかし、景観ということになると、この表を地図に落としてみなければ、空間的な変化が見えにくい。そこで、8世紀の前半(初頭を含む)・半ば・後半(末期を含む)、9世紀の前半・半ば・後半に分けて、その時々生活痕跡の分布状況を示した地図を掲げると、図1～6のようになる。

これらの地図を見れば、8世紀末・9世紀初頭に消滅した集落の多くが、福岡平野の中央部、御笠川・那珂川の流域に位置していることが分かる。逆に言えば、平野の周辺部分の集落には大きな変化がないか、あるいはむしろ新しく営まれはじめた様子も窺えるわけで、実はこの傾向は、10世紀以降においても引き続き見られる。周辺部分の展開はそれ自体非常に興味深いものがあり、

表 1 福岡市内の集落遺跡の消長 (2)

		居住・建物跡が存在			水田跡が存在			窯跡が存在			製鉄遺跡が存在																					
地域	遺跡名	3世紀			4世紀			5世紀			6世紀			7世紀			8世紀			9世紀			10世紀			11世紀			12世紀			中世以降
		前	中	後	前	中	後	前	中	後	前	中	後	前	中	後	前	中	後	前	中	後	前	中	後	前	中	後				
福岡市早良区	西園周辺遺跡																															
福岡市早良区	清末遺跡群																															
福岡市早良区	壱食A遺跡																															
福岡市早良区	都地南遺跡																															
福岡市早良区	松木田遺跡群																															
福岡市早良区	次郎丸遺跡																															
福岡市早良区	次郎丸高石遺跡																															
福岡市早良区	鯨山A遺跡																															
福岡市早良区・西区	太田遺跡																															
福岡市早良区・西区	吉武遺跡群																															
福岡市早良区	千膳遺跡																															
福岡市早良区	有田遺跡																															
福岡市西区	姪浜遺跡																															
福岡市西区	拾六町ツヅジ遺跡																															
福岡市西区	宮の前遺跡																															
福岡市西区	生の松原遺跡																															
福岡市西区	野方遺跡																															
福岡市西区	野方勧進原遺跡																															
福岡市西区	野方久保遺跡																															
福岡市西区	野方岩名限遺跡																															
福岡市西区	野方平原遺跡																															
福岡市西区	草塚古墳群																															
福岡市西区	原前田遺跡																															
福岡市西区	原深町遺跡																															
福岡市西区	都地遺跡																															
福岡市西区	金城城田遺跡																															
福岡市西区	浦江谷遺跡群																															
福岡市西区	黒塚A遺跡																															
福岡市西区	飯氏遺跡群																															
福岡市西区	大原A遺跡																															
福岡市西区	東桑原遺跡																															
福岡市西区	桑原遺跡																															
福岡市西区	大原C遺跡																															
福岡市西区	堀ノ内遺跡																															
福岡市西区	七反田遺跡																															
福岡市西区	大塚遺跡																															
福岡市西区	女原遺跡																															
福岡市西区	湯納遺跡																															
福岡市西区	湯納遺跡群																															
福岡市西区	広石遺跡群																															
福岡市西区	名切谷遺跡																															
福岡市西区	笠間谷古墳群																															
福岡市西区	今山遺跡																															
福岡市西区	羽根戸原C遺跡																															
福岡市西区	鶴町遺跡																															
福岡市西区	鶴崎古墳群																															
福岡市西区	大原D遺跡群																															
福岡市西区	片江辻遺跡																															
福岡市西区	コノリ遺跡																															
福岡市西区	城田遺跡																															
福岡市西区	浦江遺跡																															
福岡市西区	乙石遺跡																															
福岡市西区	今津遺跡																															
福岡市西区	青木遺跡																															
福岡市西区	下山門遺跡																															
福岡市西区	下山門敷町遺跡																															
福岡市西区	堀本一丁目遺跡																															
福岡市西区	徳永遺跡(四ツから徳永A遺跡)																															
福岡市西区	堀本横田遺跡																															
福岡市西区	元岡・桑原遺跡群																															
福岡市城南区	飯倉B遺跡																															
福岡市城南区	飯倉C遺跡																															
福岡市城南区	飯倉D遺跡																															
福岡市早良区	飯倉E遺跡																															
福岡市城南区	田島A遺跡																															
福岡市城南区	片江B遺跡																															
福岡市城南区	樋井川A遺跡																															
福岡市城南区	浄泉寺遺跡																															
福岡市城南区	大谷古墳群																															
福岡市城南区	梅林遺跡																															
福岡市城南区	梅林古墳																															
福岡市城南区	別府遺跡																															

個々の遺跡に即して実情を検証する必要があるが、今はむしろ中央部分の変化、すなわち集落の消滅とみられる現象について検討を加えることとしたい。すなわち、本当に消滅したと言えるのか、そしてその原因について、調査担当者はどう考えているか、その考えは妥当なのか、まずはこれらの点について検討することから始めよう。なお、取りあげる遺跡の所在地については、図7、8を参照されたい。

もとより筆者は考古学を専門とはしていないので、個々の遺物の年代観について云々する資格が欠いている。従って遺物・遺構の年代観については報告書の記載を尊重することとし、あたかも報告書自体が文献史料であるかのように史料批判を試みることにした。報告書の文意を伝える際の過ちをできるだけ避けるために、引用が長くなりがちであるが、ご容赦いただきたい。

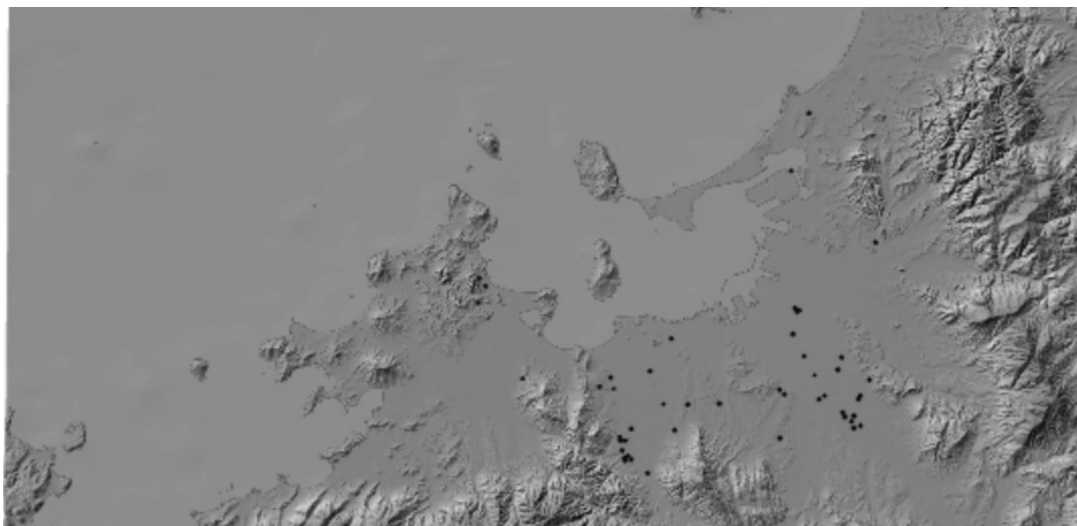


図 1 8 世紀前半の集落分布

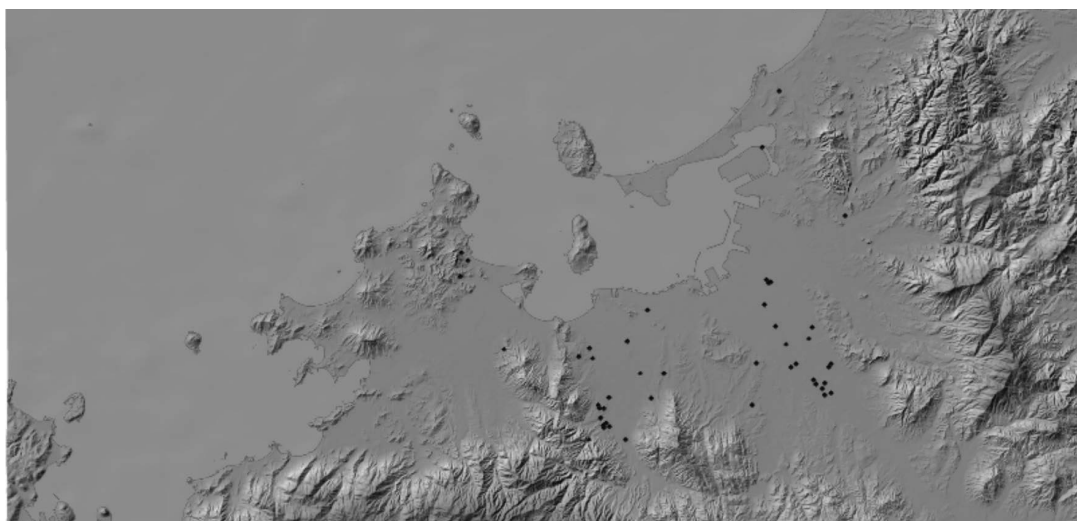


図 2 8 世紀半ばの集落分布

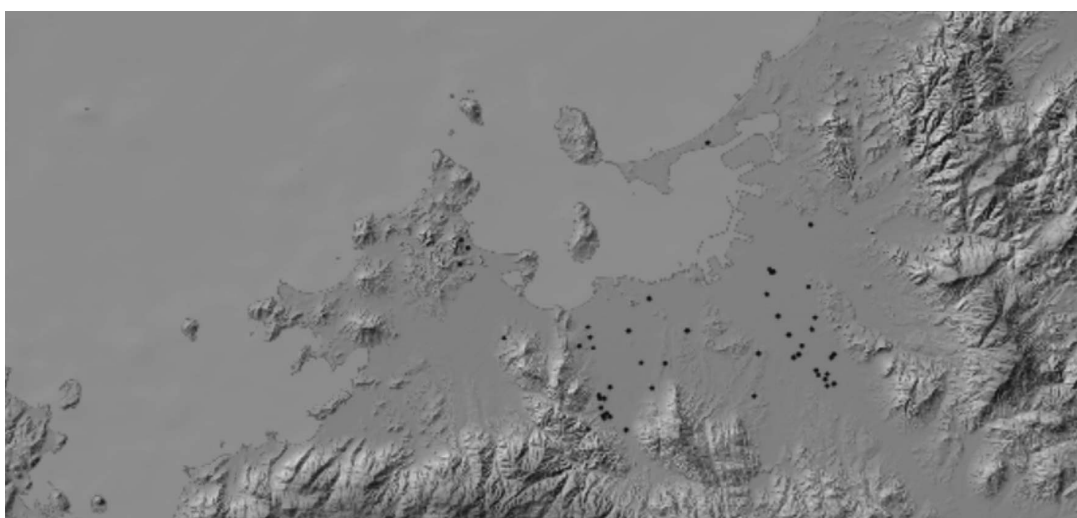


図 3 8 世紀後半の集落分布

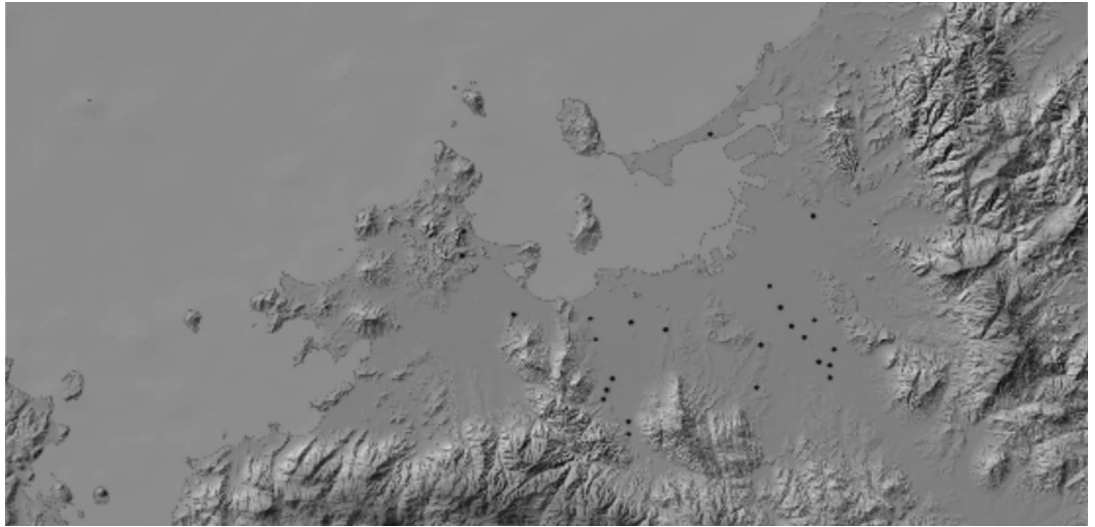


図4 9世紀前半の集落分布

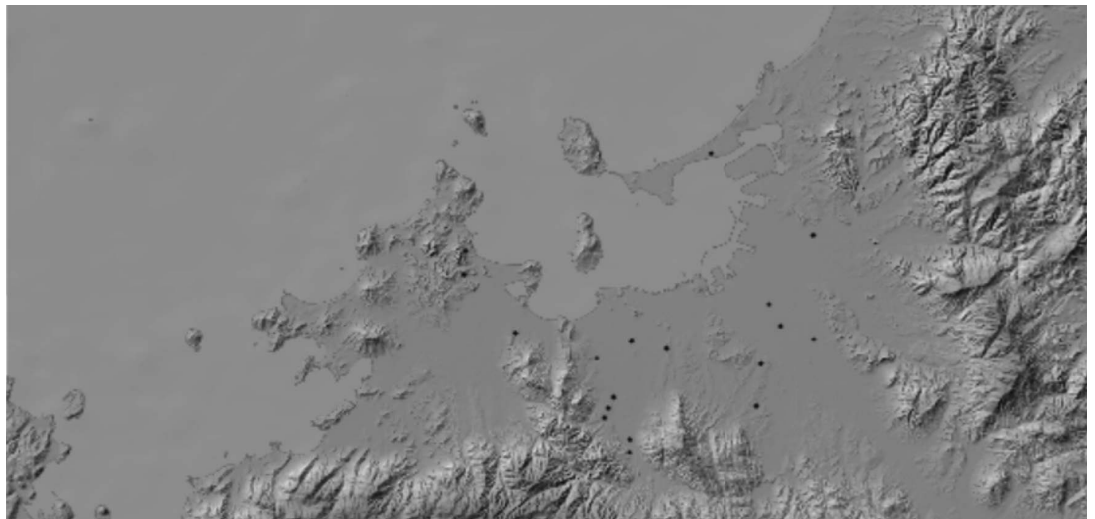


図5 9世紀半ばの集落分布

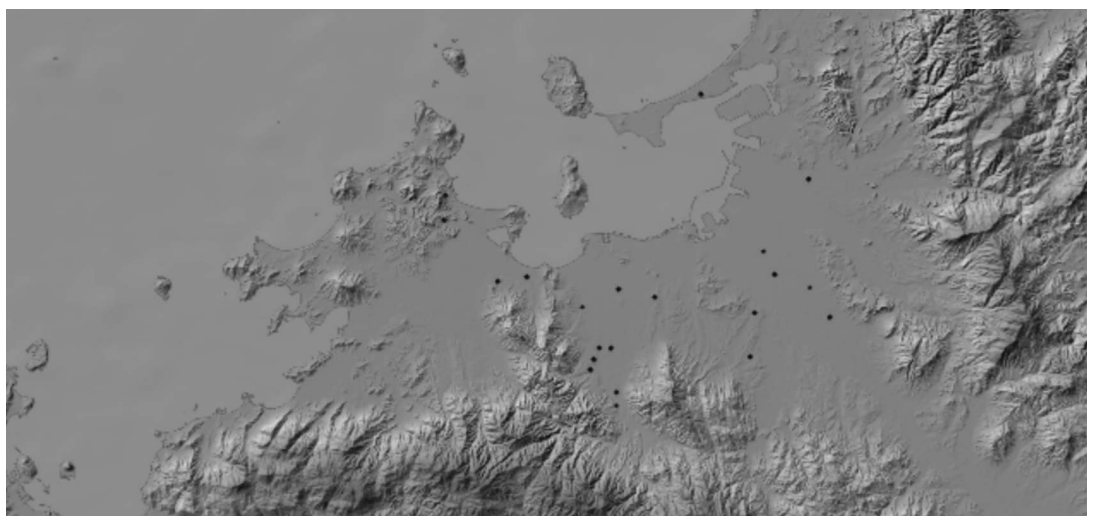


図6 9世紀後半の集落分布

## ②……………麦野・雑餉隈・南八幡遺跡

まず初めに、麦野（A・B・C）・雑餉隈・南八幡遺跡を取りあげてみよう。

この三つの遺跡は、御笠川と那珂川とに挟まれた南北にのびた標高10～20m前後の低位段丘上および緩傾斜面上に位置しており、ヤツデ状に開析された浅い谷が入り込んでいるため、地字では三つに分けられているが、実際には一体の遺跡と見るべきものである。この台地のそもそもの形成は、約7万年前の阿蘇IV火砕流によっている。すなわち花崗岩の基盤を阿蘇火砕流からなる八女粘土層とその上の軽石質火山灰（鳥栖ローム層）が覆っており、これがいわゆる地山となる。周辺には須玖、比恵、那珂、板付等の弥生時代を代表する集落・生産・埋葬遺跡が散在するが、麦野・雑餉隈・南八幡遺跡においては、弥生時代の住居址が若干検出されるものの、古墳時代の生活痕は

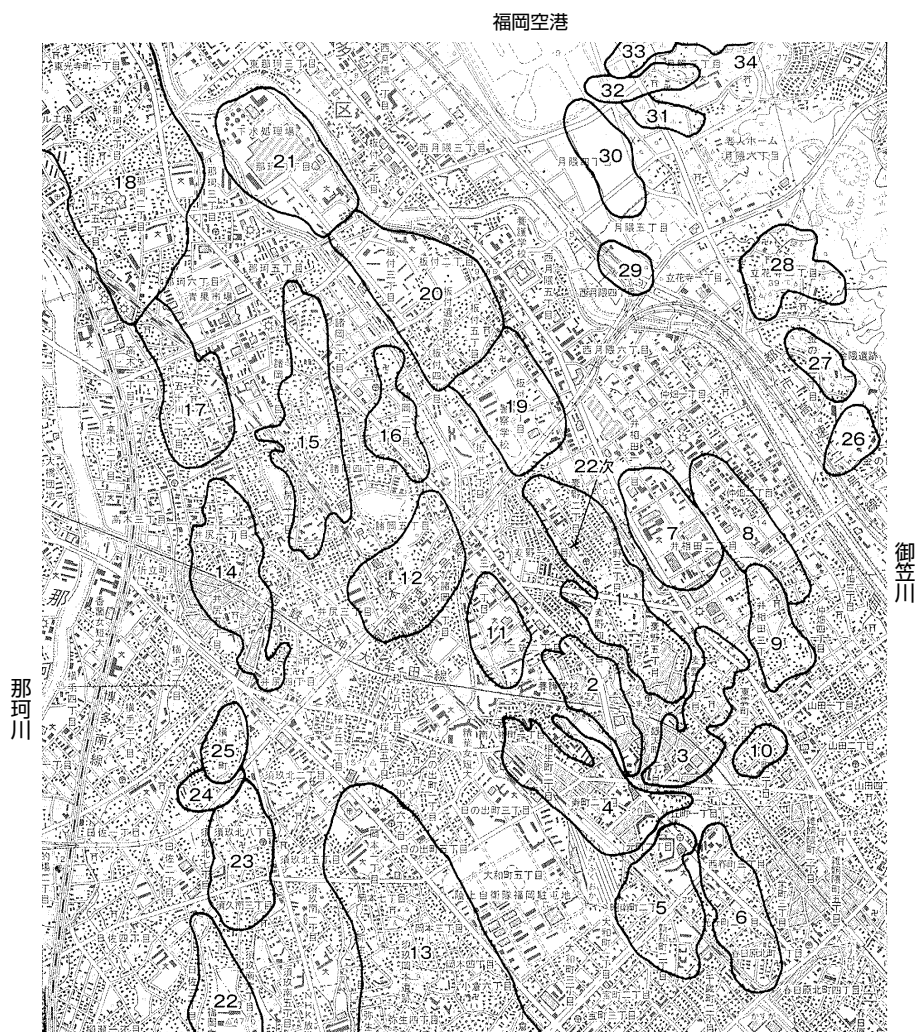


図7 麦野・雑餉隈・井相田遺跡周辺遺跡分布図

1 麦野 A 遺跡, 2 麦野 B 遺跡, 3 麦野 C 遺跡, 4 南八幡遺跡, 5 雑餉隈遺跡, 7 井相田 C 遺跡,  
8 仲鳥遺跡, 9 井相田 A 遺跡, 10 井相田 B 遺跡, 19 高畑遺跡, 20 板付遺跡, 21 那珂君休遺跡,  
28 立花寺遺跡, 29 立花寺 B 遺跡, 30 下月隈 C 遺跡。  
[福岡市埋蔵文化財調査報告書第1298集『麦野 A 遺跡 8』2016年, より]

かなり希薄である。

こういった麦野・雑餉隈・南八幡遺跡にあって集落が形成され始めるのは7世紀に入ってからであるが、調査地点によって、あるいは調査担当者によって、集落の盛衰の年代観に若干のズレがある。報告書刊行の年次にそって調査の所見を紹介すると、おおよそ以下になるだろう。

**1992-1998** 麦野 A 第4次調査区の報告書において大庭康時氏は「当集落は7世紀後半から9世紀初にかけて継続して営まれた集落で、8世紀中頃に最盛期を迎えたものと考えられる」と概括し、更に細かく言えば、特に8世紀に入って密集し始め、その中でも8世紀中頃に最も繁栄が見られ、8世紀後半に入るとピークを過ぎ、9世紀初を過ぎると殆ど集落の体をなしていないとした[福岡市埋蔵文化財調査報告書第275集『麦野A』, 1992年, 38頁。以下、報告書名に冠した数字は、すべて福岡市埋蔵文化財調査報告書の通し番号を示す]。

次で宮井善朗氏は、集落景観の変容の背景について、雑餉隈遺跡第5・8・10次の調査を概括しつつ、以下のように述べている。

雑餉隈遺跡9次地点では7世紀末ないし8世紀初頭に、方形の配置を持つ大形建物群が現われる。その規模と配置は官衙的性格を思わせるものがある。8世紀前半から後半に至ると集落は遺跡群全域で爆発的に増加する。各遺跡群のどの地点を掘っても、該期の住居に当たらないことがないと言っても過言ではない。これらの住居は例えば雑餉隈遺跡5次, 8次, 10次地点合わせて5,500㎡の中に58基と、かなりの高密度で分布する。当然遺跡全体としては粗密はあったろうが、それにしても該期の村落景観は相当壮観なものがあつたと想像される。この集住の契機としては大宰府、水城、大野城などの国家的規模の土木事業ないしはその維持、営繕に関するものと推測していたが、雑餉隈遺跡9次地点の大形建物の検出により、その可能性は高まったように思われる。但し、8世紀後半にはこれら国家的構築物の創建はほぼ終息していたであろうから、そのための集住とは考えがたい。

なおこれらの集落は9世紀に下る物のごくわずかである。遺跡群内では雑餉隈5次のピットなどからわずかに遺物が見られ、掘立柱建物などの存在が推定される。麦野 A 遺跡3次調査で井戸が1基見つかった程度である。その後の中世前半期も遺構は希薄である。[569集『雑餉隈遺跡4』1998年, 3頁]

要するに宮井氏は、「遺物の上からも奈良時代前半に属するものと、奈良時代後半に属するものがあり、概ね奈良時代一杯にわたって営まれていた集落と考える」[同前137頁]のである。このように概括した上で同氏は、密集した竪穴住居群と掘立柱建物群とがセットになって配置されていると考え、政治的・強制的な集住が行われたのではないかと見ている。[同前138頁]

**1999** 次いで南八幡遺跡の第8次調査報告書において力武卓治氏は、

南八幡、麦野、雑餉隈遺跡群の7世紀末から8世紀代の主な遺構を合計すると、竪穴住居跡146軒、土坑56基、井戸7基、掘立柱建物跡は時期判断が難しいものも含めると39棟を数える。もちろんこれらの遺構は同時期に営まれたものではない。南八幡遺跡群2, 3次では、奈良時

代8世紀中頃から後半にかけての堅穴住居跡が計11軒検出されているが、出土遺物やカマド位置から少なくとも2度の建てかえが推測されている。耐久性のない木造堅穴住居からしても妥当と思われるが、未掘部の堅穴住居跡数を加えると、一大集落の景観が容易に想像できる。雑餉隈遺跡群9次調査では、7世紀末～8世紀初頭にかけての大型掘立柱建物群が検出され、その規模や配置などから官衙的な施設と推測されている。今回出土した円面硯や瓦類などは、その推測を裏付ける有力な遺物ではあるが、数量的にも質的にも奈良時代の華やかなイメージとはほど遠い。100軒を超す堅穴住居跡からなる集落でありながら、かまどはあっても食器以外の遺物はほとんどなく、生活感が乏しい。国際外交が繰り返されていた大宰府や鴻臚館とは比較しようもないが、あまりにも貧しく、山上憶良の『貧窮問答歌』を彷彿とさせる。周辺に生産基盤であった水田がなかったわけではない。弥生時代奴国の中心地域として、早くから低地の水田化は進んでいたはずである。しかし、9世紀になると堅穴住居跡はほとんど姿を消してしまう。このようなことから、大宰府や水城などの国家的施設の建設や修理などに従事させるために集住させたという推測も頷けよう。生産活動を基盤とする集落でなかったために、衣食に関する遺物が少なく、国家的な政治の動きとともに、集落の発展も終わったのであろうか。

と、やや踏み込んで集落の景観の推移とその背景について述べた[602集『南八幡遺跡群 第8次調査』1999年、30頁]。

**2005** 一方、台地の先端部ほど分布が希薄になるとはいえ、雑餉隈第14次調査(600㎡)で19軒、第15次調査(650㎡)で8軒の堅穴住居址を検出した堀苑孝志氏は、これらの堅穴住居は8世紀前半から始まり、およそ半世紀で衰退するという年代観を示した上で、

こうした特異とも映る歴史的背景には、律令体制の整備がなされていく過程での、大陸との対外的諸問題や西海道九国二島の九州統轄における緊張といった、内憂外患の影響も多分にしていたものと考えられる。こうした重要な役割を担わされたのが大宰府であり、外交、防衛、九州経営と、まさに「遠の朝廷」と呼ばれる機能を果たしていた。こうした大宰府と当該遺跡は、近い位置関係にあることから、何らかの関連性があったことは想像し難くはないはずである。[868集『雑餉隈遺跡5』2005年、1頁]

この一端を窺わせるものに前回調査で発見された、7世紀末ないし8世紀初頭の大型建物群がある。その規模と配置(2棟が直交して配されている一坂上)には官衙的性格が認められ、役務に携わる人々を集住させた一つが、雑餉隈遺跡の姿であり、その必要性がなくなるのと同時に、集落は忽然と姿を消したのではないだろうか。[同前 144頁]

と概括した。

ところが、同じ年に刊行された報告書で本田浩二郎氏は、麦野A遺跡の中央部南側に位置する第7次調査区で検出された、東門ルート(水城東門に到る官道)に直交する方向に走る8世紀中頃～8世紀末前後の柱穴列(塀?)と溝状遺構、及びこれに伴う可能性のある四脚門を紹介しつつ、これらを官衙関連遺跡(郷衙ないし別院等を想定)の外周を区画する2時期にわたる外郭遺構と見て、

周辺の住居址が廃絶する直前の時期であることに注意を促した。また、雑餉隈遺跡第9次調査で検出された大型掘立柱建物2棟についても、7次調査区の建物と同様なので8世紀後半代に位置づけられるとする。その本田氏による麦野遺跡群・雑餉隈遺跡の調査結果の概括は、

官道南西側の低丘陵上に展開する麦野C遺跡・雑餉隈遺跡・南八幡遺跡からは、8世紀後半から8世紀末にかけての竪穴住居群などが、広範囲（最大で南北2.5km×東西1.2km程度の範囲内に竪穴住居約200軒以上・掘立柱建物50棟以上）に展開した状況で検出される。これらの住居群は、各遺跡内でいくつかの群集を形成しているものと考えられるが、同時期に存続した一連の大規模な集落と考えられている。これらの集落については、これまでの調査成果においては大宰府・水城・大野城の造営・修繕などの国家的大規模事業等に従事した労役集団のために形成された集落である可能性が想定されていたが、この集落群の存続時期とこれら国家的構築物の造営時期には大きな隔たりがあり、これとは異なる当時の社会・時代背景などの要因による集住政策の産物であるものと考えられる。

一方これらの遺跡とは反対の官道東側に位置する井相田遺跡群や高畑遺跡では、8世紀中頃以降の掘立柱建物群で構成される集落が検出されており、上級官人の居住地や官衙施設に伴う倉庫群とする見方もある。出土遺物からも官道の西側集落と東側集落とでは大きな差があり、麦野遺跡群・雑餉隈遺跡などでは墨書土器などの官人の存在を示す遺物の出土量は僅かである一方、井相田遺跡では墨書土器・木簡・人面墨書土器などの遺物が多数出土している。これらの官道を挟んで同時期に展開する遺跡群での検出遺構・出土遺物の違いは、居住集団の差や明確な居住域の区分が行われていたことなどを示す資料として注目される。

というもので[867集『中南部8』2005年, 28～9頁], 明らかに堀苑氏とは年代観が半世紀ほど異なっており、これまで強調されてきた国家的構築物との関連とは異なる集住背景を考えようとしている。

**2009** 続いて、麦野A遺跡第20次調査を担当した榎本義嗣氏は、域内から8世紀前半の竪穴住居址を検出し、時期的にその次に当たるものとして、12世紀以降の土坑、白磁片等を挙げている[1056集『麦野A遺跡7』2009年, 8・13・15頁]。つまり、この間の時期の生活痕は見いだされないことになる。

**2011** 更に、竪穴住居4基を検出した雑餉隈第16次調査の報告書において担当の長家伸氏は、検出された住居に8世紀代、8世紀中頃、及び8世紀中頃～後半という年代観を与えつつ、遺跡群全体について、

竪穴住居跡の計画的な配置や規格性の高さから意図的な集住が行われたことが想定できる。また、麦野A遺跡7次、雑餉隈遺跡9次調査に見られるような一般集落に伴う建物とは異なる建物が配されていることから、公的な権力によって開発された人工的な集落の可能性を考えると出来よう。これらの遺跡群からこの直前・直後の遺物がほとんど出土していないことも、自然発生的な集落でないことを裏付けるものと考えられる。出土遺物についても一般集落と異なり、農工具等が見られず生活感のないことが指摘されている。また、建物配置について

は特に大規模な調査が行なわれた雑餉隈5・8・10次調査において、いくつかの主軸方位にまとまっていることがわかる。

と、一般集落ではないとの見方を強調している〔1115集『雑餉隈遺跡7』2011年、14頁〕。

**2012-3** こののち、麦野C遺跡第15次調査を担当した小林義彦氏は、当該調査区では12世紀前半の井戸・土坑しか見いだされなかったものの、全体像について、

7世紀末から8世紀はじめには、雑餉隈遺跡9次調査区で方形に配置された大型の建物跡群が出現する。その規模と配置は官衙的な性格を想起させるものがある。さらに、8世紀前半から後半に至ると集落域は、丘陵の全域にわたって展開する。南端の雑餉隈遺跡では、5次調査区で50棟を越す住居が検出されている。また、東側の麦野C遺跡では1次調査区と5次・13次調査区で70棟にのぼる住居群がある。住居は、数回に亘っての建て替えがなされ、長期的に集落が展開していたことが推測される。西側の南八幡遺跡でも台地南縁の2・3・6・8・9次調査区を中心に集落域が展開しており、小さな丘陵ごとに多少の規模的な差異を有しながらも集落域が展開している。殊に、雑餉隈遺跡や麦野C遺跡はその傾向が顕著で、雑餉隈丘陵における拠点集落的な様相を想起させる。

なお、平安時代のはじめになると集落域は急速に縮小する。麦野A遺跡の3次調査区と本調査区（15次）で井戸や土坑が検出されているほかに柱穴から遺物が散見され、掘立柱建物の存在が想起される。

と概括し〔1244集『麦野C遺跡8』2014年、3頁〕、結局は宮井氏の年代観に戻っているように見受けられる。なおこの前年の南八幡遺跡第19次調査報告書では、歴史時代の遺構は未検出だが、担当した小林義彦氏は、多少規模的な差異を含みながらもこのあたりでは集落域が長期的に存続し、特に「雑餉隈遺跡や麦野C遺跡はその傾向が顕著で、雑餉隈丘陵における拠点集落的な様相を想起させる。あたかも「雑餉隈」の名が、大宰府官人の雑掌の居住地や食糧倉庫が建ち並んだ所とする古説に符合するようである」と述べている〔1207集『南八幡遺跡10』2013年、3頁〕。

以上、なるべく異なる担当者による発掘調査の所見を調査年次順に並べてみた。遺物の年代観を云々する能力を欠く筆者には、これらで述べられている遺構の年代観のうちどれが正しいのか判断することはできない。ただ、基本的には新しい報告書の記述がより洗練されたものと見るべきだろうし、また、多くの担当者の見解を無視するのも穏当ではなかろう。そういう一般的な見通しのもと当該遺跡群についての所見を概括するならば、おおよそ以下のようなろう。

①河川に挟まれた低位段丘とその緩傾斜面上に8世紀初頭に突然出現し、8世紀を通じて密集して竪穴住居が営まれたが、8世紀末には忽然として消滅し、しばらくは基本的には遺構が見られなくなる。

②博多湾と大宰府とを結ぶ官道に近く、また調査域内2ヶ所に官衙的配置を持つ掘立柱建物を擁するが、竪穴住居で検出される遺物は貧相であり、何らかの公的役務に動員された人々の住居

として、計画的に設けられた可能性が大きい。

ただ、こういった集落の景観やその推移を認めるとすれば、以下のような疑問も生じるだろう。

第一。半ば公的な業務に携わる人々の集住域として当該地域の集落遺跡を説明すると、701年に大宝令が施行され、律令制が本格運用されることと集落の形成とが対応し、9世紀の律令制動揺期になって集落が衰退するという説明に都合が良いことは確かである。ただ、大宰府政庁の整備については、7世紀末の草創期（第Ⅰ期）のち、8世紀の10年代に第Ⅱ期政庁造営のピークが認められるのであり、水城や大野城の造成はこれより早い660年代に遡るが、いずれも第Ⅱ期大宰府政庁の整備と時を同じくして門の建て替えなどの整備が行われている。鴻臚館（筑紫館）の整備については、あまり明確には分からず、8世紀を通じて断続的に整備・拡充されていった様子が知られるが、やはり第Ⅱ期大宰府政庁の整備と同じ時期が、一つの画期と言えるようである<sup>(13)</sup>。要するに、660年代の後半は8世紀の前半、特に10年代が、さまざまな労働力が必要とされた時期なのである。となると、なぜ8世紀初頭に当該地域の集落を営み始めるのかについての説明が求められるとともに、なぜ周辺の大規模造営が一旦完了した後も、当該地域の集落がそのまま、あるいは更に繁栄して存続するのか、という問題がある。

第二。公的な要素を強調した説明では、8世紀末になって衰退する理由が説明しにくい。735～740年の西海道から始まって全国に及ぶ疫病の大流行、及び740年の藤原広嗣の乱の最中にも維持されるような大集落が、8世紀末に衰退する理由については、一般論としての「律令体制の動揺」という説明ではなく、当該遺跡に即した説明が求められるのではあるまいか。「雑餉隈」という地名から、大宰府に出頭してくる西海道諸国島の「雑掌」と何らかの関連があった地域であろうとの推測は、あるいは成り立つかもしれないが、大宰府と西海道の諸国島の雑掌とのやりとりは9世紀に到って途絶えるわけではなく、むしろ調庸の納入、四度公文の勘会をめぐっては、より切迫していった可能性が大きい<sup>(14)</sup>。とするならば、雑掌たちは、雑餉隈遺跡の中かどうかはともかく、この近くに拠点を営み続けたとしか考えられない。

第三。そもそも8世紀初頭において、洪積台地上にさほど格差のない堅穴住居群が突然営まれ始め、8世紀を通じて繁栄し、しかし、9世紀に入ると一気に衰退に向かうという当該遺跡群の様相は、衰退の時期こそやや遅れるが、「はじめに」で触れたように、千葉県の上総の内遺跡など東国の集落でも一般的な現象と言え、果たして大宰府・鴻臚館や官道という公的施設そのものと集落の展開を結びつけるのは妥当なのかという疑問が拭いきれない。

以上に述べたように、当該遺跡群の盛衰については、その背景がうまく説明できてはいない状況であると言えよう。集落の盛衰については、公的役務の従事者の集住域という説明ではなく、東国の場合と同様に、もっと一般的な人々の居住域という考え方に立たなければならないのではないだろうか。もしそういう観点に立とうとすれば、問題は生産の場がどうなっているかにあろう。上に述べたように、当該遺跡群の中では生産活動、具体的には稲作の場は、その低位段丘上という立地からみて、当然ながら設けられていない。力武氏が言うように「周辺に生産基盤であった水田がなかったわけではない。弥生時代奴国の中心地域として、早くから低地の水田化は進んでいたはず」である。当該遺跡群の住民も、これだけの規模の集落ともなれば、力役に従事して得た官給の食料

で生活していたとは考えがたい。ましてや当該遺跡群内に郷衙ないし郡家別院を2ヶ所（時期は異なる可能性がある）想定できるのであれば、これは一般の公民が、たとえ貧しくとも家族一緒になって生活していた集落としか考えられず、微発された課丁のみが仮住まいする建物群と考えるべきではない。むしろ、同様の盛衰をたどった東国の集落民と同じく、日常的には稲作等の生産活動に従事し、租調庸を納める普通の人々と考えの方が自然ではあるまいか。

となると、鍵は、隣接する低地の様相が握っていると言わざるをえないだろう。

### ③…………井相田遺跡・仲島遺跡

麦野・雑餉隈・南八幡遺跡の載る丘陵と御笠川との間に挟まれた低地に位置するのが、井相田A・B・C・D遺跡及び仲島遺跡である。この遺跡における集落の消長を、例によって報告書の年次に沿って見ていきたい。ただし、福岡市と大野城市にまたがる仲島遺跡については、その福岡市部分の3次にわたる調査のうち、報告書刊行済みの第2次調査区のみを取りあげる。まず、井相田C遺跡について。

**1987** 西日本新聞社の印刷工場建設に伴って12,621㎡という広域にわたって調査された井相田C遺跡第1次調査の報告書で担当の山口譲治氏は、立地について以下のように述べている。

（現況では一坂上）標高12.5mから北に向って9m前後に下がる沖積地となり、水田地帯となっている。この沖積地の中には、各所に微高地が形成されている。

井相田C遺跡は、御笠川中流域西岸の微高地上に位置している。[152集『井相田C遺跡I』1987年、3頁]

（中世においては一坂上）本遺跡では（中略）550㎡前後の区画をもつ水田址が検出された。

周辺の中・低丘陵・台地には、同時期の集落があり、沖積地には、那珂君休遺跡などでみられるように、本遺跡と同規模の水田址が検出されている。

本遺跡周辺地域は水田として使用されたといえよう。[同前 5頁]

その上で、発掘調査の成果として古代に関しては、大略以下のように述べている。

第1次調査区では、総柱（倉庫）10棟を含む掘立柱建物42棟（建替えは1棟とした）、竪穴住居址4基、井戸3基、土坑墓1基、炉1基、土坑46基、大溝1条、溝175条、柵列7条が検出されている。このうちいくつかの掘立柱建物の柱穴から、8世紀前半・半ば・後半・末、9世紀初頭の土器片が出ているが、8世紀後半のものが多。竪穴住居址や井戸・土坑出土の土器もおおむね8世紀に収まり、まれに9世紀前半のものが混じる。7・8・13区検出の東西の柵列3条に囲まれる浅い溝群、14・15・20・21区に分布する溝群は畑状遺構6枚とみられる。大溝（SD1）の南岸にそって幅1.5mの畦畔状の遺構が検出され、水田面と考えられる所では黒灰色粘質土で水田耕土も検出されているが、南北方向の畦畔は確認できなかった。大溝北岸溝群の北側から第86号溝（SD86）に囲まれる間も南岸と同じ土が堆積しており、水田址の可能性が高い。大溝（SD1）は、出土土器から8世紀前半代に掘削され、9世紀後半から

10世紀の土器をもつ第292～294号溝との切り合い関係から、9世紀後半には大溝としての機能を失なっていることが分かる。[同前6～8頁]

大溝SD1は幅8m前後、深さ1.4～2.4m前後で、出土した須恵器の年代観は7世紀後半～8世紀末に収まるが、やや8世紀後半が多いようである。土師器も、8世紀後半のものが多く、9世紀半ば以降のものもあるという。利用時は、よく浚えられていたらしい[同前9頁]。

竪穴・掘立柱建物の主軸の方角によって時期区分すれば、この集落は「Ⅰ期は8世紀前半、Ⅱ期は8世紀中頃、Ⅲ期は8世紀中頃から後半、Ⅳ期は8世紀後半、Ⅴ期は9世紀前半」に区分され、南から北へと拡大しつつ8世紀後半にピークを迎え、水田造営はⅢ期からⅣ期にかけて行われたかという(94～97頁に各時期の遺構配置図がある)。建物群の景観については、「建物群は規則的な配列があり、8～9世紀の間におおまかに5回の建て替えがある。一単位の建物群は基本的に庇付母屋と脇屋、倉庫からなり、これが2～3小群にわかれて変遷する」とも概括されている[658集『井相田C遺跡5』2000年、6頁、吉留秀敏氏執筆]。

**1988** 続いて第1次調査区の北隣の板付中学校建設予定地11,000㎡を対象に行われた第2次調査で検出された奈良時代後期から平安時代初頭の遺構は、掘立柱建物2棟、竪穴住居4棟、井戸2基、土坑6基、溝5条、柱穴多数である。これらの遺構は、調査区南東部を標高最高点とする地域に密集し、北東方向へ傾斜する面においては少ない。このことから第1次調査区で確認した集落は、第2次調査区の中央部にその北限を求めることができ、一方、調査区西から調査区外へ広がっている遺構の希薄な傾斜面上には、奈良時代を中心とする遺物が多く含まれる暗黒褐色の包含層が見いだされ、後世の大規模な削平がうかがえる。その上には中世の水田面2枚及び池畔状遺構・溝及び土坑墓が検出されている[179集『井相田C遺跡Ⅱ』1988年、瀧本正志氏担当]。このうち水田面は、鎌倉時代に廃絶のものと、室町時代に廃絶のものがあるが、それぞれの開始期は不明である[同前18頁]。

注目すべき事に、井戸SE02の枠内の底近くからは、奈良時代の土器とともに木簡3点が出土しており、「月十四」「十六日」といった日付を記した木簡や、「丸部」「押勝」「額田部」などという人名とともに、「五人」「四人」といった人数が、横材に多数記されている。何らかの労役に徴発する際の書き付けの可能性があるが、労役の趣旨は分からない。

問題は平安初頭の集落の廃絶の要因をどう考えるかであろう。この点において注目されるのは、瀧本氏が「調査地周辺は、平安時代の早い時期に大規模な削平を受けているようである。これは遺構の遺存程度、微高地が北へ下る斜面上に厚く堆積した包含層等の状況等から推察される。この削平工事は、調査地周辺における耕作地の造整、整備に深く関係するものと考えられる」[同前48頁]としていることであろう。この見解に従えば、平安初期にこの一帯で大規模な農地造成が行われ、鎌倉時代に廃絶した水田面まで連続的に耕地とされていたということになるが[同前49頁]、果たしてそうなのだろうか。北へ下る緩傾斜面に奈良時代の遺物を包含した層が厚く堆積しているということは、奈良時代の生活面が大規模に削平され、その分の土砂が緩傾斜面を埋めたことを示しているのは確かだろう。しかし、第1次調査区においては、このような大規模造成・削平の痕跡がな

いし、また、第1次調査区に見えるように、微高地上には集落を、低地には水田を造成している時期に、低地を埋めるような造成をしてまで、微高地を水田化するのだろうか、あるいは、果たしてできたのだろうかという疑問も生じる。

井戸枠の部材、木簡の出土などから、瀧本氏は、第1次調査で検出された掘立柱建物には公的性格が強いとし、「掘立柱建物、堅穴住居、井戸、溝等で構成される当遺跡の公的施設は、遅くとも平安時代中期頃（11世紀）にはその姿が調査地から消え去っている」としているが〔同前48頁〕、11世紀という年代観は唐突で、遺物の年代観と合致しない。また、公的という意味も慎重に考えなければならない。後述するように、9世紀には付近に高子内親王家領（内蔵寮領）の存在が知られるからである。

**1996** マンションの建設に先立って900㎡が調査された第5次調査の報告書で吉武学氏は、当該地点が「古墳時代には水田、古代には集落の一部、中世には再び水田」となった〔458集『井相田C遺跡第5次 高畑遺跡第14次』1996年、12頁〕とし、古代の集落はこれより東には拡がらないとしている。

**1997** 報告書の刊行が前後し、また発掘回数に改変が生じてしまったが、福岡市埋蔵文化財センター建設に伴う事前調査として、井相田C遺跡の（新）第4次調査（2,249㎡）が実施された。調査区の西半分は御笠川の分流として東から西に流れる小河川の堆積土であり、東半分が微高地（砂礫層）で、こちらに遺構が残っていた〔519集『井相田C第6次』1997年、5頁。大庭康時氏執筆〕。ただし、遺構の一部は川に洗われている状況であり、集落の縁辺ということになる。柱穴1,100基、土坑（井戸を含む）113基、集落内の区画や排水を意図したらしい溝状遺構21基、6世紀末～7世紀初頭の堅穴住居跡6棟、旧河川3条が検出されたが、柱穴からは2間×2間の倉庫状の建物を主体とする少なくとも7棟の6世紀後半～8世紀前半の掘立柱建物が復原され、旧河川は8～9世紀から中世後半までと考えられるという〔同前6,71頁〕。注目されるのは、「これら御笠川の分流は、かなりの範囲にわたって流路を移しながら暴れており、本調査地点周辺がきわめて不安定な地域であったことが推測される。事実、遺構が乗る微高地の基盤となっているのは、旧河川が運んできた砂質土であった」〔同前71頁〕と述べている点である。遺構検出面を覆う土層について特段の言及が無いので、全体が洪水に遭ったことがあるのか判然としないが、デルタ状に形成された微高地の不安定さというのは理解できる。

**2000** これも報告書の刊行は前後したが、井相田C遺跡第3次調査（740㎡）を担当した吉留秀敏氏は、まず、当該遺跡が含まれる「御笠川下流域一帯の低位段丘面にはおよそ縄文海進以降にはほぼ全面を被覆する新たな河川堆積があったと考えられる」〔658集『井相田C遺跡5』2000年、2頁〕とその立地の特徴を述べ、

古墳時代後期には各所に新たな集落が形成される。御笠川左岸の丘陵上では板付遺跡、高畑遺跡、南八幡1～3、9次などに住居跡群がみられる。右岸では雀居遺跡、立花寺B遺跡6次、立花寺遺跡などがある。雀居遺跡、立花寺B遺跡6次は御笠川の自然堤防上に立地し、立花

---

寺遺跡は丘陵上に立地する。いずれも竪穴式住居、掘立柱建物などで構成される集落である。[同前 3 頁]

と概観する。その上で「古代になると遺跡の分布に変動がある」として、御笠川左岸については、沖積微高地上に井相田 C 遺跡 1, 2 次や仲島遺跡のように掘立柱建物を主体とする集落が出現する。また、微高地縁辺には水田が造成されている。それに対し丘陵上には麦野 B 遺跡 1～4 次、麦野 C 遺跡 1, 3, 5 次、南八幡遺跡、雑飼隈遺跡など、竪穴式住居を主体とする集落が広く出現する。[同前 3 頁]

とした上で、

低地部では古代末～中世初期を境に集落関連遺構が減じ、かわって水田畝畦や水路などの水田遺構が広域に分布するようになる。低地内の微高地はこの時期に大規模な削平を受けて水田に造成されているようである。なお井相田 D 遺跡 1, 2 次では 11 世紀後半から 13 世紀の水田跡が広く検出され、条里との整合が注意されている。

としている [同前 4 頁]。一方古代の御笠川右岸については、

立花寺 B 遺跡、立花寺遺跡、下月隈 C 遺跡などがあり、立花寺 B 遺跡は御笠川に沿った自然堤防上の集落、立花寺遺跡は丘陵上の大規模な地山整形を伴う集落である。いずれも比較的規模の大きい掘立柱建物、井戸などで構成されている。出土遺物にも輸入陶磁器の優品が多く、奈良時代末から平安前期における「筵田駅」に関連する遺跡と考えられている。下月隈 C 遺跡は両遺跡の中間の低地にあり、同時期の水田跡が確認されている。

と概括したのち、古代末～中世にかけて、

御笠川右岸では旧自然堤防上の立花寺 B 遺跡に 12～14 世紀の掘立柱建物、井戸、木棺墓などがあり、館施設の存在が推定されている。下月隈 C 遺跡では古代水田の埋没後、永く集落が設けられていたが、14 世紀段階に廃絶し再び水田となっている。

とまとめた [同前 4 頁]。「古代末～中世初期」における水田面拡大の画期は、左岸については 11 世紀後半以降を指しているように読めるが、右岸については、集落の連続性、あるいは集落から水田への変貌にタイムラグがあるのかどうか、そのあたりは言及されている他の遺跡の調査の進展をあわせて見なければならぬだろう。第 3 次の発掘では「竪穴式住居 12、掘立柱建物 5、土坑 13、溝 8、柱穴 210、段落ち状遺構」が検出されたが、住居・建物の殆どは古墳時代のもので、古代末の磁器片を包含する埋土に覆われた削平面が広く覆っているため（担当者は水田の造成に伴うものとみている—37 頁）、古代の景観復原は難しく、奈良・平安時代の遺物は空白期と言ってもよいのではないと思われる。むしろ本報告書で注目されるのは、御笠川の流路の推定であり、現在の御笠川と麦野 A 遺跡等が載る丘陵部との間には、大野城市山田付近を扇央部として放射状に広がる流路 A～D が検出され、「流路 A～D と微高地 1～3 は、分布範囲や堆積状況から御笠川の氾濫

により形成されたデルタ状の地形の一部であることがわかる」とされたことであろう〔同前 34～35 頁。地図を含む〕。ここで言及されている流路 A は、後に那珂古川と呼ばれることになる。御笠川の流路堆積物が形成した微高地には、少なくとも弥生時代以降集落が営まれるようになったが、

微高地は削平された竪穴式住居跡などからみて、流路や低地との比高差が 1 m 前後あるために、微高地そのものの水田としての開発は長く困難であったと見られる。井相田 C 遺跡 1 次調査では古代前期において微高地上に広く畑が作られていたことが確認された。なお流路沿いの水田面は灌漑用の水路の掘削をともない、古墳時代以降に次第に微高地側への拡大が認められる。古代末期（11 世紀頃）に微高地上の集落は途絶え、微高地の削平が行われている。また、縦横に用水路と見られる溝が掘られている。この時点で微高地は削平され、流路は埋められて、広域な水田面が形成されたと考えられる〔同前 36 頁〕。

とされた。この記述に従うと、微高地の削平と大規模水田の造営は、11 世紀頃のいわば大開発時代の事業ということになるが、第 2 次調査での見解、すなわち傾斜面を埋め立てるために覆った土砂に包含されているのは奈良時代の遺物に限られるから平安初期の削平（造成）であるという見解とは、数百年の違いが生じることになる。もちろん論じている場所は異なるのであるが、同じ遺跡の中で見いだされる同様の開発痕跡に数百年の時間差があるというのは、やや問題になるように思う。

**2008** 第 7 次調査区（438.9 m<sup>2</sup>）は井相田 C 遺跡の南端に当たり、南は谷で切られていることが判明した。担当の屋山洋氏は、1 次・2 次調査では微高地上で 8 世紀を中心とする掘立柱建物の建物群の他に畑の畝状遺構を、西側の沖積地で水田を確認したが、中世には畑化と水田化が進むと思われ、集落等の遺構はほとんど見られなくなる、とこれまでの成果を概括し、また地形については第 3 次の報告書を認めている〔975 集『井相田 C 遺跡 6』2008 年、3 頁〕。ただ、当該調査区自体では、古代では 7 世紀～8 世紀の柱穴群、9 世紀後半～10 世紀頃の土坑と掘立柱建物群を検出しているものの、遺物が少なく時期が確定できない遺構が多いという〔同前 12 頁〕。

**2009** 第 8 次調査区では、「水田層の下、標高 11.0～11.1 m 以下で遺物包含層となり、さらに標高 10.6～10.9 m で地山のシルトないし砂層となり、この上面で遺構を検出した。地山とした層は沖積層であり、堆積物が一定しておらず、遺構覆土との差異が不明瞭な部分もあった。地山上面は、総じて南側がやや高く、北西側がやや低くなる。包含層の堆積も、南側は薄く、北西側が厚い。遺物量もこれに比例して調査区西・北半が多い。なおこの包含層は、後世の水田開発などにより二次的に形成されたものと考えられる」〔1027 集『井相田 C 遺跡 7』2009 年、9 頁〕という久住猛雄氏の報告が目される。地山も遺構の覆土もかなりよく似た沖積層であるということは、そもそもの沖積層が御笠川や那珂古川由来のものである以上、覆った土砂も同様の河川堆積物であることを示すと見てよいのだろう。二次的に形成された遺物包含層は、第 2 次調査の報告書で述べるのと同様に水田開発時に造成されたと考えられており〔同前 11 頁〕、時期が問題になることは先述した。

検出された遺構は、主に古墳時代後期後半から飛鳥時代前半～中頃までの水路、区画溝、柵列、井戸、土坑であり〔同前 28 頁〕、遺物包含層も基本的に飛鳥時代までのものとされているので〔同

前報告書抄録]、その上層になったはずの奈良時代には、当該地区には何も無かったか、あるいは痕跡が飛ばされてしまったかということになろう。

**2013** 第9次調査 458 m<sup>2</sup>を担当した佐藤一郎氏は、それまでの成果を「井相田C遺跡ではこれまで10次の調査が行われ、12世紀後半～13世紀の水田跡、8世紀前半～平安初期の集落跡、遺跡の北辺では弥生時代前期の生活遺構が検出されている。第1・10次調査では水城東門から延びる官道跡の一部が検出されている」[1178集『井相田C遺跡8』2013年、7頁]と概括した上で、当該調査区では、

盛土・耕作土・床土下に灰褐色粘質土（遺物包含層）・黒色粘質土・黒灰色土（粗砂を含む）が堆積している。遺構の覆土は上面の遺物包含層とほぼ同じ灰褐色粘質土で、溝や柱穴など黒褐色粘質土上面で確認された。暗灰色粘質土層の上面（最高所で標高11.50m）は東から西側に向かって下がる緩斜面をなし、西側の約1/3を占める旧河川の落ち込みとなる。比高差は0.9mを測り、顕著な遺構は検出されなかった。（中略）検出された遺構は第2次調査で検出された溝の延長の他、溝8条、掘立柱建物4棟の他建物の一部とみられる柱列を検出した。溝や柱穴掘方からは6世紀後半～末の須恵器・土師器が出土している。黄褐色粘質土層からは6世紀代の土器が出土しているが、遺構は検出されていない。[同前 9頁]

とし、西側に河川が走る古墳時代後期～古代の集落の縁辺部に当たるとみている[同前 20頁]。

同年に報告された第10次調査の調査区（592 m<sup>2</sup>）は、井相田遺跡の南西縁辺部、那珂古川の流路に南端を接する位置にある。担当の阿部泰之氏は、「中世は、第1次調査で条里に合致する水田、第2次調査では貯水池の機能を有したと推測される池状遺構が検出され、遺跡が乗る沖積地は完全に水田化されたものと推測される。一部の区割りは市街地化前の水田と合致し、現代までつながる景観がこのとき形成されたのだろう」[1179集『井相田C遺跡9』2013年、2頁]と当該地のこれまでの調査成果をまとめている。その上で当該報告書では、水城東門ルート of 東側側溝の検出が特筆されるが（16頁に連続させた地図を載せている）、全体の状況としては「今回の調査地は、那珂古川の北岸に広がる沖積微高地上に位置する。（中略）遺構面はおおむね平坦で、遺構の遺存状況からも遺構面は大きく削られていると推測される。調査区南部は那珂古川の旧流路で遺構面のシルト層自体失われている」[同前 7頁]とあり、微高地とは言っても相当水辺に近い縁辺部に位置することがわかる。遺構面が大きく削られている原因についての推測は無い。ほぼ直線的に伸びる官道の側溝については、何回も掘り直され、「砂礫で埋まっていること、（東側に一坂上）分岐する小溝があること、流れに直交する杭列がみられることから最終的に水路として利用されたものと推測される。出土遺物は溝からのものが主で、7世紀～8世紀代の須恵器が主体だが底面直上から黒色土器A類碗が出土し、9世紀の早い段階に埋没しはじめたものと推測される」[同前 7頁]としている。沈殿の様相からは、一定の期間、常に多量の水が南から北へと流れ、ところどころで杭列を用いて小溝に導水していたらしいことが分かるが、溝から出土する遺物は7～8世紀の須恵器が主体であり、したがって9世紀には埋まり始めたと考えられるわけである。「SD 01は用水路の機能をも有していたわけで、現在的那珂古川から北に広がる水田へ水を供給していたのだろう。用水路となっ

たのが官道廃絶の前後いずれであったのかはわからない」[同前 15 頁] とはするものの、先述の須恵器が流水を利用した水場の祭祀に用いられた可能性も指摘していることから[同前 8 頁]、いわば 7～8 世紀の比較的早い時期から、つまり担当者が 8 世紀前半に措定する官道の造設[同前 15 頁]から間もないころから、当該側溝が灌漑水路としても用いられた可能性を否定できないことになろう。官道の補修が 9 世紀に入って疎かになっていく、あるいは付け替えが行われることは一般的に見られることで、現に水城西門ルート機能は 8 世紀一杯ではないかとされているが[同前 15～16 頁]、当該調査地区の場合には、灌漑施設としての側溝が、9 世紀に入ると放置されがちになったことが注目される。

以上、井相田 C 遺跡の調査成果について紹介してきた。井相田 C 遺跡の景観はおおよそ以下のように推移したとまとめられる。

- ①もともと御笠川とその支流が網の目状に北流する低地と微高地とからなり、8 世紀にはその微高地上に集落が営まれ、低地は水田化されていたと考えられる。水田の用水のために造設されたとおぼしい第 1 次調査区で検出された大溝は、8 世紀前半に始まり、8 世紀中はよく浚えられていたが、9 世紀後半には機能しなくなっていた。
- ②低地の水田と微高地上の集落とをよぎって官道（水城東門ルート）が造設されたが、その側溝は灌漑用水路としても利用されていた。しかし、9 世紀の前半には、その側溝水路は手入れされずに放置されたようであり、ちょうど同じ頃、微高地上の集落はその立地が削平されて傾斜面の埋土とされるような土木工事が行われた。
- ③その工事が微高地の水田化を目指したものと、比高差からみて考えにくい、畑地化の可能性は残るだろう。ただ、周辺から 9 世紀後半～11 世紀前半の遺物がほとんど出土せず、もちろん遺構も検出されないことからみれば、このあたりには極めて生活痕が乏しいと言わざるを得ない。あたり一帯は、御笠川や那珂古川の氾濫原に島状に微高地が点在するとも言うべきところであり、敢えて微高地を削平したならば、洪水の危険性も増したことだろう。
- ④こういう現地に再び生活の痕跡が現れるのは 11 世紀後半に入ってからであり、全面的に水田化したのは中世になってからである。

では、この周辺の地域ではどうだったろうか。まず井相田 D 遺跡について。

**1999** 当該遺跡の発掘調査報告書で最初に刊行されたのは、第 2 次調査区のそれであった[610 集『井相田 D 遺跡 第 2 次調査』1999 年。I 区は井澤洋一氏、II 区は吉田扶希子氏が執筆]。調査区の古環境復原（パリノ・サーヴェイ株式会社）によれば、縄文時代晩期末にも水稲耕作がなされていた可能性があるが、その後は沼沢地ないし湿地のような状態で、時々乾燥することもあったと考えられている。その後、池沼は埋没して低平な土地となり、シルト・砂からなる単層が数層にわたって堆積しており、腐蝕層を発達させるような状況は継続せず、頻繁に河川の氾濫の影響を受けていた[同前 158 頁]。古代以降については、「発掘調査により水田が検出されているが、この水田は堆積環境から、しばしば氾濫の被害を受けたことが推定される。ただし、氾濫によってもたらされた土

壤は、植物の成長に有効な成分を豊富に含んでいる可能性が高く、土地の生産性といった点では好条件であった可能性がある」とし、また、湿田の可能性もないではないが、乾田ないし半乾田の可能性が高いとする[同前 159 頁]。

発掘調査では「第Ⅰ区は、水田耕作土が6面存在したが、洪水により砂を被った水田面のみ調査対象とした。古代から中世の水田跡2面を検出し、土師器皿、瓦質土器、中国製白磁・青磁などが出土した。第Ⅱ区は、盛土の下に6面の耕作土（水田面）を検出したが、その内2～3面は、洪水により砂を被っていたが時間的な制約のため下層の水田跡3面に限定して調査した。又、水田面の下層の青灰色粘土層上面においては、弥生時代の遺構面を確認し」[同前 5 頁]た。Ⅰ区においては、御笠川よりの方が高く西側が低い段状の水田面が現代の耕作土の下に4～6層検出されており、水田面とは確認できないものの粗砂・微砂層が幾重にも重なった層も検出された。言うまでもなく洪水の痕跡であるが、層によって違うものの、北東方向から南西方向へ、あるいは南東方向から北西方向へという洪水の方向が確認でき[同前 12 頁]、御笠川の氾濫が頻繁に起こっていたと考えてよい。最下層の第1・2面水田区画は、条里方向にほぼ一致する畦畔を持ち、遺物は少ないものの白磁・青磁の薄片が出土しているため、11～12世紀という年代観が示されている[同前 19 頁]。

Ⅱ区においても同様に6面の水田が検出されたが、洪水によって砂層を被った下層の3面が調査対象とされた。3層とも水田面の形状はほぼ同じであり、Ⅰ区よりやや広めの区画を持ち、また条里と軸線を同じくしている。第1面では中世の水田跡（8区画）・畦畔・水路跡が、第2・3面では古代の水田跡（9区画）・畦畔・水路跡が、第4面では弥生時代後期の水田跡、畦畔、水路跡、池跡や古墳時代前期の水路跡が検出されており、第1～3面からは、土師器皿、坏、中国製白磁・青磁片等が出土している[同前 21～22 頁]。こうしたことから、担当者は第1～3の水田面を11世紀後半～13世紀とみている[同前 108 頁]。

**2002** 続いて井相田D遺跡の第1次・第3次調査区の報告書も刊行された[701集『井相田D遺跡 第1・3次調査』2002年]。ここは現在の御笠川左岸の土手に接する地点で、第1次調査区は用地買収の時まで水田として用いられていた。第1次調査では、4,215㎡の調査区をⅠ区～Ⅳ区に分け、Ⅰ・Ⅱ区では2面の水田面を検出、上層は12世紀後半～13世紀前半で条里に沿った畦畔を持ち、下層は11世紀前後の造営と推測され、こちらの区画は大きく直線的でない。Ⅲ区では水田面は検出されず、ただ、遺物包含層からは11世紀ころの土師器小皿・黒色土器碗片が、そしてその下のピットからは越州窯青磁片が出土している。このピットと同じ面では、散在している柱穴から堀立柱建物1棟が復原されている。Ⅳ区では西端で水田面が検出され、「水田面下層を掘り下げる際に、天禧通宝（初鑄年1018年）が出土した。2月6日から下層の遺構検出にかかった。遺構上面には砂が堆積しているが、水田面は確認されなかった。白色細砂を埋土にもつ畑の畝溝とみられる溝状の遺構を検出した。水田面と同様に砂が堆積した足跡（そのほとんどは牛蹄）が散在している」という[同前 8・11 頁。佐藤一郎氏執筆]。いずれの水田面も洪水砂によって覆われていたが、これは立地からして当然である。

第3次調査（1,650㎡）では時間が制約されたために、現代の水田面を含め4層はある水田面のうち、最古の水田面（第2次調査区の第3面）、及びその下層の弥生・縄文の両面に調査を集中さ

せたが、5～15 cmの厚さで堆積している砂層の下用最古の水田面は、摩滅の進んだ10～12世紀にかけての土器片が出土していることから、古代末～中世前期と判断されている〔同前 19・22頁。上角智希氏執筆〕。

**2009 仲島遺跡**（福岡市域部分）については、その第2次調査の報告書のみが刊行されている〔1037集『仲島遺跡1』2009年、横山邦継氏執筆〕。当該遺跡は、井相田C遺跡と御笠川との間に位置する標高12 m前後の低丘陵に位置し、南北に長く、東側に隣接する大野城市側にも広がっていると推測されている〔同前 3頁〕。第2次調査地（1,060 m<sup>2</sup>）自体は、地山が東から西側へ緩く傾斜する地形にあり、遺構は比較的密度濃く検出され、方形の竪穴住居跡2軒、掘立柱建物5棟（1×1間2棟、1×2間1棟、2×2間2棟）、不定型な土坑4基、炉跡3基、主として南北方向に走る溝状遺構40条、柱穴74個が知られる。また、全体に遺物包含層も顕著に見られ、須恵器・土師器を中心に多くの遺物が出土している。これらの遺構は、時期的に殆どが6世紀末・7世紀初頭から8世紀の所産と考えられ、一部に緑釉陶器碗を伴う溝状遺構なども知られるという〔同前 5頁〕。つまり、6・7世紀の交から8世紀までの時期の集落及び水田経営に関連する溝遺構等を検出したと言えるわけであるが、ここが集落の中心というのではなく、主体は本調査区の東・南側の低丘陵に展開するものと考えられている〔同前 6頁〕。

出土遺物を検討した結果、SC 01 竪穴住居はSD 10 溝を切ることから8世紀後半以降、最も新しいと考えられるSD 06 溝も8世紀後半頃かと推定、SB 03 掘立柱建物の掘方出土須恵器破片が6世紀末あるいは7世紀初めであり、この前後に相次いだ建物群か、とまとめ、更に権状製品が出土していることから、大宰府と関連する有力な集落の一つとしている〔同前 41頁〕。気がかりなのは、竪穴住居跡・掘立柱建物・炉跡等が検出された調査区の東側を中心に整地層と考えられる2面の遺物包含層が形成されていたことで〔同前 36頁〕、あるいはこれも井相田C遺跡等で見られた耕作地の造成にかかるものかもしれないが、詳細は不明である。

以上、井相田C遺跡の近傍にある井相田D遺跡及び仲島遺跡の調査成果を紹介したが、先に述べた井相田C遺跡の景観の推移と矛盾するものはない。より御笠川に近い井相田D遺跡では、古代では11世紀より遡る水田は検出されておらず、それ以後も頻繁に洪水の災禍に遭ったことが判明しており、微高地上の仲島遺跡では、他の微高地上の集落と同様に8世紀代の生活痕と、耕作地造成のためかと思われる削平に起因する遺物包含層の形成が見られる点が注意を引くと言えよう。

#### ④……………立花寺B遺跡・雀居遺跡・下月隈C遺跡

次に、御笠川の対岸（右岸・東岸）の低地に位置する遺跡の調査成果の紹介に移ろう。御笠川右岸に近接する立花寺B遺跡については、523集『立花寺B遺跡』〔1997年、吉武学・瀧本正志両氏執筆〕と、702集『立花寺B遺跡2』〔2002年、田上勇一郎・井上繭子・瀧本正志の三氏他担当〕という2冊の報告書が刊行されている。

**1997** 前者は立花寺B遺跡第1～3次調査をまとめたもので、立地については、当該「遺跡の

西側を流れる御笠川は遺跡の南側で西へ、西側で北へ折れ曲がりながら遺跡の周縁に沿うように流れていることから、遺跡が微高地上に位置することを知る。調査時における地表高は10 m～12 m前後を測るが、旧地表高は9 m～10.5 m、遺構検出面高は8.5 m～10 mである」[523集 4頁]とされている。福岡都市高速道路の造設に伴う調査であり、橋脚部分や一部の地上道路部分の調査に限られているため、面的な展開は無理だった。

橋脚部分のみを掘った1次調査では、それでも古代の集落跡（掘立柱建物2棟、溝状遺構4条、土坑6基）とその廃絶後の中世の河川1条、溝状遺構3条、土坑2基、水田跡（畦畔、足跡）が検出された[同前 9～10頁]。木簡も出土しているが、判読できていない。白磁や越州窯系青磁が出土した溝も「古代」と判定されている中での古代の建物・集落であるが[同前 14頁]、生活痕とし

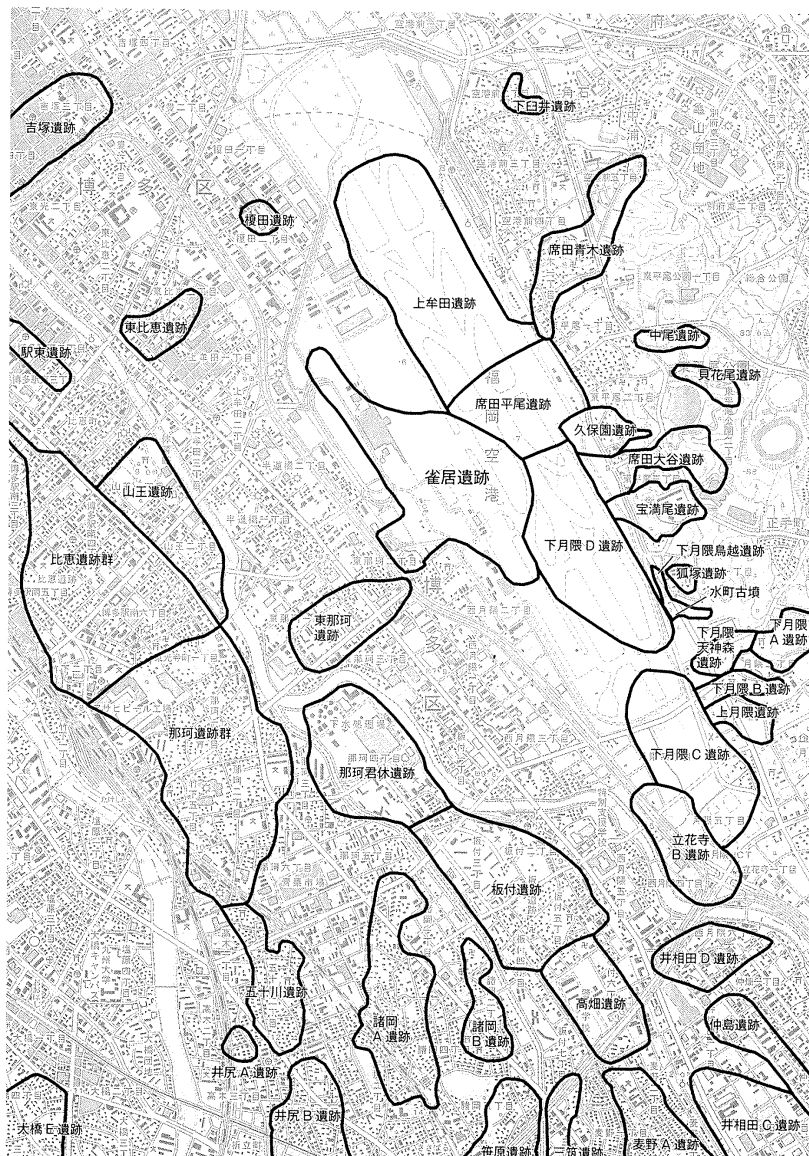


図8 雀居遺跡・下月隈C遺跡周辺遺跡分布図  
[福岡市埋蔵文化財調査報告書第1332集『雀居11』より]

ては、日用土器・瓦・製塩土器・木簡・輸入陶磁器等から、8世紀末以降と判定され、また、第1次調査区の北端では、中世以降の水田面が検出されたが、古代の遺構は全く見当たらないので、当該地点が古代の集落の北縁と見られている〔同前 20 頁〕。

この南に位置する第2・3次調査区では、9世紀後半～10世紀前半と12世紀～14世紀の二時期に区分される建物跡、井戸、溝、土坑墓、土坑などが発見されている〔同前 21 頁〕。「平安時代前半期の遺構から出土した遺物には、越州窯系青磁、白磁、緑釉・褐釉陶器、無釉陶器などがある。直接的な遺構の検出には至らなかったが、官衙的施設の存在を考えるのが妥当であろう」とまとめており、「越州窯系青磁は、碗、壺、水注、鉢などが出土し、172点を数える。その大半は、碗と壺とで97%である」という遺物の高級感（ただし優品ではない）から、具体的には駅との関連を想定している〔同前 74 頁〕。西岸とは異なり、8世紀の集落はここでは営まれていないが、これは御笠川との位置関係によるものかもしれない。

**2002** 第4～6次の調査は、第2次調査区と現在の御笠川とに挟まれた月隈ジャンクション予定地で行われた。第4次調査では、「河川出土の遺物では、須恵器で若干古墳時代にさかのぼるものがみられるものの、9世紀代と思われる須恵器の長頸壺や10世紀代と思われる黒色土器、12世紀頃の白磁碗や石鍋などが検出された。また、遺構面上層の包含層からは、8世紀頃の須恵器の蓋杯や、12世紀代の白磁や青磁などが出土している。このことから、本調査区は、第2次調査地点AⅡ区で検出された集落の一端ではあるものの、旧河川により近く、氾濫原となっていた地点であったと推定される」〔702集 10 頁〕とまとめられている。溝や包含層からの出土であり、やや年代観にとりよめのなさが感じられるのはやむをえない。第5次調査でも、遺物は青磁等が見られるものの、古代の遺構は見つからず、基本的に御笠川の氾濫で地形が造られ、中世の一時期に杭列などの生活痕が見られるだけであった〔同前 16 頁〕。

第6次調査区の成果は「A-1区は今回の調査区の中で最も御笠川寄りに位置し、調査面積も最大である。調査面積は3,533㎡である。遺構面は3面あり、1面は中世と思われる時期の溝1条と杭列を検出した。2面は古墳時代後期から中世初頭の溝6条、河川1条、井戸3基、土坑1基を検出した。3面は古墳時代中期末から後期初頭の掘立柱建物3棟、竪穴住居30軒、溝4条、河川1条、谷頭2ヶ所を検出した。A-2区は調査面積1,163㎡を測り、古代から中世の掘立柱建物3棟、溝12条、土坑11基を検出した。B区は調査面積822㎡で、2枚の遺構面を調査し、上面は溝8条、土坑2基を調査した。中世前半の遺構群である。下面では柵2条、掘立柱建物1棟、溝16条、井戸5基、土坑11基を検出した。おもに古代の遺構群である。C区は調査面積2,556㎡を測る。3面の調査をおこなった。1面は中世前半の溝3条、土坑5基と杭列を検出した。2面は溝15条、井戸1基、土坑6基を調査した。古代から中世前期の遺構群である。3面は古墳時代中期末から後期初頭の掘立柱建物5棟、溝・河川5条、性格不明遺構1基を調査した」〔同前 18 頁〕とまとめられている。

A-1区では、福岡市内では珍しい5世紀後半～6世紀初頭の竪穴住居30軒・掘立柱建物3棟を含む集落など、貴重な成果が得られており〔同前 29 頁〕、大量のプラント・オパールを検出により、各層での稲作も確認されているが〔同前 184 頁〕、8～9世紀の遺構は殆ど見いだされていない。A-2区の遺構面は1面で、「掘立柱建物3棟、溝12条、土坑11基、ピット多数を検出した。時期

は9～10世紀を中心に12世紀までの遺構群である」と報告されているが[同前 134 頁]、より詳細に見ると、掘立柱建物の柱穴から土師器の甕片が出土しているので古代と判定する[同前 135 頁]一方で、土坑状のくぼみから「須恵器、土師器、黒色土器、緑釉陶器、褐釉陶器の水注、越州窯系青磁、邢窯系白磁、瓦、砥石などが出土した。瓦には大宰府政庁などで出土する押打痕文字瓦がみられる。時期は9世紀中頃～後半のものを中心に11世紀中頃のものまでみられる。Ⅳ区からは10世紀頃の遺物が多数出土した」[同前 144 頁] ことを時期判定の根拠としているようである。ただ、同頁の表44「その他のA-2区の遺構」に示された年代は、「古代」とするもの1件を除き、分かる限りすべて10世紀以降とされている。果たして遺構面が9世紀半ばまでさかのぼれるものなのか、また、遺物が9世紀半ばから後半を中心とすると言えるのか、筆者には判断がつかない。

B区2面では、掘立柱建物とともに土坑が検出され、その土坑から「緑釉陶器、邢窯系白磁、越州窯系青磁が出土しているのが注目される。9世紀中頃～後半の遺構である」とする[同前 154 頁]。ただ、こちらも表23「その他のB区2面の遺構」によれば、B区2面に属する遺構のいくつかは10世紀以降という判断が下されており[同前 156 頁]、年代観にはやや不安が残る。

C区1面では、溝3条、土坑5基と杭列、ピットが検出され、11世紀前半～中頃以降のいくつかの年代観が示されている。「C区2面は標高9.6～9.8mの南側は緑灰色～灰褐色シルト、北側は灰白色粗砂の面で遺構検出をおこなった。溝15条、井戸1基、土坑6基を調査した。全域で遺構を確認したが、北側に分布が偏っている。SK323からは多量の遺物が出土し、その中に墨書土器がみられる。調査面積は検出面で1,717㎡である。古代～中世前期の遺構群である」[同前 162 頁]。このうち、溝SD321には、出土した遺物から8世紀後半～9世紀中頃という年代が与えられ、SD327には同様に11世紀初頭～中頃、井戸SE308には11世紀中頃～12世紀初頭、土坑SK309には10世紀、「田」「桑」などの墨書土器や邢窯系白磁碗を出土した土坑SK323には8世紀後半～9世紀という年代が与えられている[以上、同前 163～172 頁]。この下層に古墳時代の遺構面(C区3面)があるので、2面がそれより後であることは確かだが、一時期を画することができるような古代の遺構面があるのか、いささか疑問である。

このように、立花寺B遺跡は、殆ど御笠川の自然堤防と後背湿地としか言えない、洪水の危険性の高い場所に福岡平野でも珍しい古墳時代中期末～後期初頭の集落が発見されたことと、越州窯・龍泉窯・邢窯等や白磁などの貴重な舶来品(ただし、優品ではない)が大量に出土していることとに特徴があるが、奈良時代から平安時代にかけての集落という観点から見れば、その影は乏しいと言わざるを得ないだろう。ただ、舶来品の出土から、調査担当者は駅(蓆田駅)と関係があるのではないかと見ており、これは穏当な解釈と言えよう。

次に、御笠川の右岸(東岸)をやや下った雀居遺跡の状況を見てみよう。

**1993** 第1次調査(試掘)を承けた<sup>ささい</sup>雀居遺跡第2次調査は、福岡空港の国際線エプロン増設工事の際の調査で、1,700㎡の現場から古代の溝や土坑群、条里地割に伴う大溝や水田址、木簡などの遺構・遺物が数多く発見された。戦時中に蓆田飛行場が整備される以前は、標高5.0m前後で、南側の微高地上に集落があり、周辺は条里地割の残る水田という景観だった。検出された上下2面の遺構面のうち、「第Ⅰ面は、標高4.45m～4.15mを測り、淡青灰色シルトと褐色砂層を基盤として、

土坑66基、溝5条、井戸3基、溜状遺構1基、ピット47個が確認された。土坑は、径1m前後から4mを越えるものまであり、円形、楕円形、略方形、不定形を呈し、断面は皿状に窪む。井戸は、素掘りのものと井筒に曲物を用いるものとがある。溝は、南東から北西に流れる自然流路と、北西—南東方向、西南西—東北東方向をとる2条の区画溝がある。区画溝は、幅1.8～3.0m、深さ0.3m前後である。第Ⅱ面は、標高4.15～3.65mで水田址と溝が確認された。黒色粘質土が基盤となっている。畦畔、足跡が良く残っており、畦畔はT字状に接合している。溝は幅16.3mの大溝で、南東から北西側に流れている。西岸には護岸用の杭列が27mにわたって検出された」〔第322集『雀居遺跡1』6頁、担当下村智氏〕。

第Ⅰ面で検出された土坑及び溝からの出土遺物は、その殆どが10世紀後半～11世紀の土器で占められていた。一方第Ⅰ面の基盤になっていた砂層（東側はシルト質土、西側は粗砂層で、洪水などで短期間に埋没した状況を呈している。39頁）を掘り下げた第Ⅱ面で検出された水田を幅16.3mの大溝が貫くが、旧地形図との対照では、この大溝は旧地形図の地割と合致しており、坪境になる可能性がある〔39頁〕。ただ、年代観については、「10世紀代の遺物が中心であるが、奈良時代から平安時代初めにかけての遺物も出土しており、水田址も含め古代の条里制と関係する可能性が高い」〔40頁〕としか記されていない。

**1995** 第4次緊急発掘調査の報告書『雀居遺跡2』〔406集、下村智氏執筆〕では、大量に出土した遺物はすべて縄文晩期終末から古墳時代前期にかけてのものとされ、古代の遺構についての記述は無い。

一方、第5次調査の報告書『雀居遺跡3』〔407集、松村道博氏執筆〕では、縄文と弥生の遺構・遺物層より上は、古墳時代の住居址8棟が検出されたことと中世（？）の水田面の存在が記されているだけで、水田面を面として調査してはいないため、古代の状況は分からない。

**1998** 第3、6、8次調査（松村道博氏担当）と第11次調査（力武卓治氏担当）の成果をまとめた『雀居遺跡4』〔565集〕においては、第11次調査までの成果の概要が以下のように記されている。

第3次調査区では、第2次調査区と同様の集落跡とその下の洪水砂の下から水田を検出し、第2次調査区と第3次調査区とに挟まれた第6次調査区でも、厚い洪水砂に覆われて容易に検出できた不定形の古代末の水田跡を検出している。第7次調査区では縄文時代晩期から古墳時代前半に至る集落跡を検出している。第8次調査区では、上面に古代末の集落、下面に水田跡が検出され、第9次調査区では、縄文時代晩期から古墳時代前期にかけての集落が検出された。第10次調査区では、弥生時代から古墳時代にかけての集落と中世の水田が、第11次調査区では、第2次調査区から続く一連の古代末の水田跡が、当該調査区だけで50枚も検出された〔565集5頁〕。つまり、古代・中世の水田・集落については、上述した第2次調査区のほかに、第3次、第6次、第8次、第10次、第11次調査区において検出されているわけである。より詳細に見ていこう。

第3次調査区では、Ⅰ区では上面での集落跡は認められず水路と足跡（水田？）のみの調査であった。Ⅱ区では耕作土の直下から集落跡が、そしてその下の洪水砂層の下から水田跡が確認できた。土層的には何度もの洪水の痕跡が見られるが、11層の水田面の下は砂やシルトの互層があり、そ

の下に16層が、第2, 6, 8次調査区でも検出されている、すなわち空港内の北西部全体に広がる水田面である[6頁]。

第6次調査区では、今述べたように洪水砂の下から条里の方向とはやや異なる不定形の水田9枚以上が検出され、その上の洪水砂からは墨書土器が数点出土している[41頁]。

第8次調査区のⅠ面では、洪水砂で埋まった水田の上に集落が営まれているが、担当の松村道博氏は、「水田の埋没後かなり近い時期に集落が営まれしばらくの間集落が継続したものと考えられる」としている[42頁]。Ⅱ面では、30～40cmの洪水砂の下に第6層で水田面が検出されている。洪水により畦畔の流失が甚だしいが西半に14枚を検出しており、規模・構造・水掛かりは第2～6次で検出した水田と同様で、不定形である[58頁]。水田面直上の洪水砂層から墨書土器が出土している[59頁]。松村氏は、古代の水田の年代観を「9世紀前後以前の時期が考えられる。水田跡は30cmを越える洪水砂で全体が覆われ大規模な洪水が予想される。水田跡はこの地区全体に展開していたものであろうが洪水により畦畔が消失した部分が大半を占めていたものであろう。調査した水田の区画は均一ではなく長方形、方形、不定形と変化にとむ。畦畔の方位はN25°～30°Wで条里の推定方向とはやや異なる。用排水路は確認出来ていない。各水田跡では畦畔に数箇所水口を設ける田越による取排水を行っている。第2, 3次調査ではこの水田が9世紀前後に大規模な洪水により埋没した後、洪水砂が比較的高くなった部分に集落が営まれる。この集落は10～11世紀代の短い期間の小規模なものである。越州窯系青磁や木簡等の出土遺物から官衙的施設の可能性も考えられているが、少なくとも空港西側地区においては水田が埋没した後、度々の洪水があり不安定な地形であったことが窺われ、その可能性は少いと考えられる」とまとめている[60頁]。

一方、第11次の調査区を担当した力武卓治氏は、洪水砂に覆われた8枚の方形の水田面を検出したが、年代観については「周囲発掘区と同じように平安時代」とする[62頁]。なお、『雀居遺跡5』[635集, 2000年]は第7・9次の調査成果の報告であるが、先述の通り、ここでは古代の遺構は検出されていない。

**2001** 『雀居遺跡6』[677集]は「雀居ムラのガイド・データブック」という副題のついた、13次調査の成果までを含み込んだユニークな解説書である。担当の力武卓治氏は、福岡空港の国際線ターミナルが置かれることになる第2, 3, 6, 8, 11次調査区で検出された水田について「1面の集落跡の約40cm下で、平安時代はじめ頃、9世紀前後の水田と溝が洪水の厚い砂層に覆われて見つかりました」[13頁]と記し、一方、燃料タンクが造設された第10, 12, 13次調査地点で検出された水田面については、「国際線ターミナルの建物から南に約350m離れています。ここでも砂層に厚く覆われた水田を計55枚発見しました。11頁の土層図では、国際線ターミナル下の水田標高は約80cm低くなっており、時代が異なる可能性も考えるべきですが、両地点は350mと離れており、勾配率はそれ程大きくありません。福岡平野は北の博多湾に向かって傾斜しているので、同じ時代の水田と考えていいでしょう。両地点で出土した遺物から推定される年代にも、大きな矛盾はありません。(中略)水田区画は、どちらも南北に長い長方形ですが、本地点の水田は南北方向の畦畔が、やや西に振れています。また畦畔は同じようにT字交差となっていますが、乱れは少なく、東西南北によく筋が通っています。さらに大畦と思われる幅広の畦畔が東西に貫通し、全体

的に整った水田区画となっています。ただ長方形の各辺が短く、国際線ターミナルの水田跡に比べ6割方狭い面積となり、小振りな印象を与えています。このような長方区画が基本形と考えましたが、第12次では図示したように、さらに約20cm下で4枚の水田が見つかりました。幅は上部の水田とほぼ同じですが、長方形を南北に二分し、正方形に近い区画となっています。また西側の自然の流れから、浸食されないように、土を高く盛り上げて土手を築いています。この場所だけに限ったことですが、新旧を示す上下2面の水田からすると、基本区画は長方形ではなく、正方形であった可能性も考える必要があるでしょう。おそらく、毎年のように襲ってくる水害で、地形や流れが変わるたびに、水田を作りかえ、流れを治めた結果、地点ごとに不揃いの水田になったと考えられます」としている[15頁]。後ほど下月隈でも検出される9世紀前後で時期があまり変わらない2面の水田面が厚い洪水砂層の下に検出されたのであった。

**2003** 『雀居7』[746集、力武卓治氏執筆]は、第10次調査の報告書で、土層については、「4層は昭和19年まで耕作されていた水田ということになる。8層の薄い土層は5層よりも赤みがないが水田の床土と判断した。6,7層が水田耕作土ということになるが、時期を示す遺物の出土はない。16層の水田が古代であり、昭和の水田に挟まれていることから、中～近世の水田としておく。13～16は粗砂層で下部ほど粒子が細くなっている。この粗砂層は第10次調査区だけでなく雀居遺跡の全面にわたって堆積しており、洪水の激しさや被害の大きさを物語っている。この洪水に見舞われ耕作断念に追い込まれたのが、16層の水田である。現地表から深さ1.5mで今回の発掘ではこの面を第Ⅰ面とし、パワーシャベルで粗砂層を取り除き、水田跡の検出作業を始めた。17層は暗褐色シル下層でこれを剥ぐと18層黒色粘質土が現れる。この土層も雀居遺跡のほぼ全面に見られ、第7,9次調査区ではⅠ面として調査され、古墳時代の遺構が確認されている。今回は第Ⅱ面と呼び、古墳時代前期～弥生時代後期の遺構面とした」[12頁]と説明されている。

このうち、地表下1.5mで検出された水田面(16層)については、「洪水で堆積したと思われる砂層で全面が覆われ、水田の耕作を不可能にしている。砂層の厚さは、南北端に大きな差はなく約80cmを測る。砂層があまりにも多量であることからパワーショベルで取り除いたが、この作業だけで数日を要する量で、その洪水の凄まじさを示している。当時の農民にとっては被害甚大でまさに廃村に追い込まれたに違いない」[16頁]と述べている。水田の平面プランについては、正方形ないし長方形とは記すものの、条里との関係は明言されていない。この水田面から25cmほど下で弥生時代後期～古墳時代の遺構面を検出しているが、その間に水田面があったとはされていない[24頁]。

同年刊行の『雀居8』[747集、力武氏執筆]は第12次調査の報告書で、第10,13次調査区の水田畦畔と接続する上位水田面の下から、下位水田面が検出された。下位水田面には土手状の畦畔とこれに伴う流路が認められたが、結局は薄い洪水砂で覆われ、その上に上位水田面を造成したと考えられている[7頁]。上位水田面からは「太」「十」などの墨書土器、人形、斎串が出土している[12～16頁]。

こういった成果を承けた年代観は、次のようにまとめられた。「古代、9世紀前後には条里制の地割りで整然と水田が区画される。墨書土器、木簡、斎串、人形などの遺物が出土していることか

ら、大宰府に通じる官道や官街的な施設が近くにあった可能性が強い。しかしこの水田も大規模な洪水で厚く砂層に覆われ完全に埋没する。10～11世紀になってI地点の砂層が盛り上がった場所に小集落が営まれているが、火災にあったのか消滅し、その後は洪水に幾度となく襲われたようである」[223頁]。このまとめでは、大規模な洪水で覆われてしまった条里地割りに則った水田面の下の、やはり洪水に遭った不定形の水田面のことが省かれてしまったようである。

同年には『雀居9』[748集]も刊行されたが、これは第13次調査の報告書で、時間をおいて数回に及んだ洪水がもたらした砂層の下に水田面を検出し、その下は弥生～古墳の遺構面であること、これまでと同様なので[8頁]略す。また『雀居10』[1281集、2016年]は第14次調査の報告書で、古代・中世の水田が検出されているが、13次までと同様の所見であるので、省略に従う。

**2018** 米軍施設建設予定地のうちの514㎡を調査した第19次調査の報告書『雀居11』でも、第1面で古代の水田と河川、第2面で弥生時代前期末から中期前半の河川が発見された。「第1面の水田は標高4.5～4.7mで検出した。洪水による粗砂でおおわれており、中央部是水田面を削って粗砂が堆積している。畦畔は残りが悪く、水田一枚の規模を明らかにすることはできなかった。水田耕作土上からは須恵器・土師器・曲物底板などが出土しており、土器形式や木製品の放射性炭素年代測定から8世紀代の水田と考えられる」[30頁。田上勇一郎氏執筆]と結論づけられた。

**2019** 第20次調査の報告書である1360集『雀居12』(荒牧宏行氏執筆)では、厚い洪水砂の下から古代の水田面(第2面)を検出しており、その上や溝から出土した土師器は11世紀代や12世紀代[8～9頁]であるものの、水田遺構は9世紀代と見ている。[17頁]

**2020** 第15・16・17次調査の報告書である1387集『雀居13』(吉田大輔氏執筆)では、第15次調査区では砂層の下の水田面(第1面)の直下に薄い砂層(0～20cm)を挟んで畦畔の踏襲が見られる第2水田面を検出しているものの[11頁]、第16・17次調査区では、厚い洪水砂に覆われた古代の水田面は1面しか検出できなかったという[56, 146頁]。第18次調査の報告書である1388集『雀居14』(板倉雄大氏執筆)では、洪水砂の下の水田面や溝からは7～8世紀の須恵器が若干出土しているので[19, 24, 27頁]、構築開始は6世紀代まで遡る可能性があるものの[244頁]、8世紀代の水田と判断している[241頁]。

以上、雀居遺跡の調査成果を年次順に見てきたが、当該地域に一面に広がっていた古代の水田面が、大洪水ですべて覆われたことが判明していると言える。その水田面の年代については長く「9世紀前後」とされてきたが、最近では8世紀という見方も示されている。

ただ問題は、この水田面が一つではなく、その下に若干様相を異にする水田面が隠されている部分(第12・15次調査区)もあること、さらに、条里との関係についても、合致する部分(第2・12・15次調査区)もあれば合致しない部分(第8次調査区)もあるということであろう。これをどう考えるべきか、この問題に取り組むために、御笠川の右岸をやや遡った下月隈C遺跡の状況を見てみよう。

1998 空港周辺整備に先立って、第2次8,900㎡、第3次3,575㎡という広大な面積を調査した下月隈C遺跡の調査報告書は、その立地を以下のように説明している[566集『下月隈C遺跡2』1998年、6頁、宮井善朗氏執筆]。

下月隈C遺跡は、福岡平野の東端に位置し、福岡空港の南側に広がる遺跡である。地形的には月隈丘陵と御笠川に挟まれた、東西500m程の幅の沖積面に立地する。基盤面は段丘礫層で、その上位に厚い青灰色粘土が堆積し、その上に洪水などで何層もの砂、シルトが堆積し、各時期の遺構が重層的に検出される。このような状況は同じような立地である雀居遺跡、立花寺B遺跡などとも類似する。……(下月隈C遺跡第)1次調査は2、3次調査の約400m北側で行なわれている。主として弥生時代後期の集落関係の遺構が検出されている。遺構検出面は標高7m程で、3次調査の下層水田面より更に1m以上深い。2、3次調査の成果からは1次調査地点と2、3次調査地点が同一の遺跡かどうかは疑問である。

第2次調査上面(調査区の西半分で展開)では、14世紀後半頃に廃絶した溝をともなう集落があり、その後は近世・近代まで水田であったと見られ、南西端では河道が検出された[同前12頁]。ただし、幾条も重なって検出された溝のなかには、12世紀中頃前後のもの[同前19頁]、14世紀後半代のものがあり[同前25頁]、このほか、龍泉窯系青磁・越州窯系青磁や邢窯系白磁の破片も出土する多数の土坑・井戸・ピットが検出されている。これらの遺構・遺物から、当該調査区遺構面のうちの上面について宮井氏は、

下月隈C遺跡2次調査地点では上面にあたる標高9mほどの微高地の上から、生活遺構が検出された。その主な検出遺構は、溝、土坑、井戸、ピットなどである。この面に集落が展開していたことが明らかになったといえよう。この集落は古代前期(奈良時代)頃、下面の水田が洪水によって放棄されたのち、ある程度の安定したシルト層の堆積を待って、古代後期(平安時代)頃より、集落が作られ始めると考えられる。

と概括し、次いで「検出遺構を今仮に、大きく3期に分けて考えて見たい」として、大略以下のようによまとめた[同前77～78頁]。

第1期 ヘラ切り底の土師器杯、皿を指標とし、集落の初期の遺構と考えられる段階。比較的長期にわたっていると考えられ、また、切り合う溝や井戸など、時期の異なる遺構群を包摂しており、いくつかの小期に分けることができるだろう。第1期前半の遺構は主として南半区に集中する傾向が見られ、注目すべき遺物として検出面南端から出土した精製品の越州窯系青磁碗や蛇の目高台の白磁碗、緑釉陶器皿、また滑石製の権など、一般の集落では見られない遺物が含まれている。しかし、遺構として集落景観を明らかにするまでの成果には恵まれていない。第1期の集落の中心は調査区の南側(駅と関係があるらしい立花寺B遺跡の方)にある可能性が大きい。第1期後半には北側に展開するが、その北端の土坑墓の副葬品は貧弱なので、既に一般の集落となったと見られる。(第1期は、下文第2期の記述から推せば、降っても11世紀以前の状況となろう。各期の年代観は、後述するように、第4次調査の報告書では、より絞ら

れている一坂上)

第2期 第1期と第3期の中間に属する段階。12世紀から13世紀代。第1期の後半期に北側に拡大した遺構群を受けて、遺跡の中に稠密に生活遺構が分布する状況が認められる。溝2と、入口に門状遺構を備える堂々たる溝1とで囲まれた空間に、井戸、廃棄土坑、溝1と軸を同じくする掘立柱建物等が作られ、集落としての景観が整う。出土した遺物は、博多遺跡群には及ばないが、中国製磁器、陶器の優品も相当量出土する。ピットは西端に近いほど密になる傾向があり、中心部は調査区の更に西側にある可能性が高い。

第3期 ほぼ14世紀にあたる段階。集落の終末期。第2期に比べると遺構が激減する感否めない。該期を最後に集落は廃絶し、その後は水田として利用されることになる。

上述した第1期の遺構検出面より更に0.7～1.0m下に、顕著な洪水砂層で覆われ、洪水で流した部分以外の畦畔を良く残した(上層)水田面が検出されており、更に西半分では、砂を挟んでその下からも(下層)水田面が見つかった。水田面の中央をほぼ南北に河道が貫いており、上層水田面は東西から河道に向かって低くなるが、下層水田面は、逆に河道の方が微妙に高く、西に向かって(つまり御笠川に近づくにつれて)低くなるという[同前81～2頁]。上層水田面には、田植え直前(耕起中)・最中・直後のさまざまな段階の違いが見いだされ、埋没の季節が推定できる[同前82～3頁]。なお、東・西の上層水田面の南端では洪水砂の堆積が薄く、すぐ上をシルトが覆っていることから、洪水の直後に復旧して水田を新たに経営していたとみられる場所もあった。西半分に見られた下層水田面は、上層水田面との間に洪水砂層を挟むところと挟まないところ、厚く挟むところがあり、また畦畔が、従って区画が重なって(=踏襲されて)いるところが目立ち(ただし、下層の方が小規模区画)、両者の時期が接近しているように窺える。西半上層は東半と同様に耕起中であつたが、一部しか調査できなかった下層水田面では、足跡と稲株痕とが平均的に残っており、田植え中だったのではなかろうか、とする[同前90～92頁]。

調査した上層水田面の直上には時期の接近した1～2面の水田があり、その0.5～1mほど上に、レベル的に上述した第1期に相当する時期の水田面が検出されるという[同前94頁]。

西半下層水田面直上からは、8世紀初頭～前葉の須恵器が、東半の上層水田の畦畔の盛土内からは8世紀初頭の須恵器、東西の上層水田の上の洪水砂層からは8世紀前葉の須恵器や8世紀後半の土師器、8世紀前葉から中頃の土師器、埋没河川からは8世紀前葉の須恵器等が出土しており[同前98～99頁]、このことから担当の久住猛雄氏は、東半水田および西半上層水田の時期は、一応8世紀初頭以降(前葉頃成立か)、8世紀後葉までというように考えておきたいと述べ、西半の下層水田については、下限は上層の直前(8世紀初頭)で良いが、区画も小さく、上限は古墳時代前期よりは後としか言えないとしている。また、「この2次調査の東半水田に続く、東側の3次調査の第2面(下層)水田は、8世紀後葉の遺物を含む河道により一部を破壊される形になり、またその水田の埋没もその時期に推定される可能性があるから、少なくとも2次調査の東半水田に関しては、同様に8世紀後葉の埋没を推定して大過ないだろう」と述べ、西半上層水田を埋めた洪水も同時期とみるのが穏当と述べている[同前100頁]。妥当な見解だろう。

結局、上層水田については、8世紀前葉には経営されていたが、8世紀後葉に起こった洪水で調

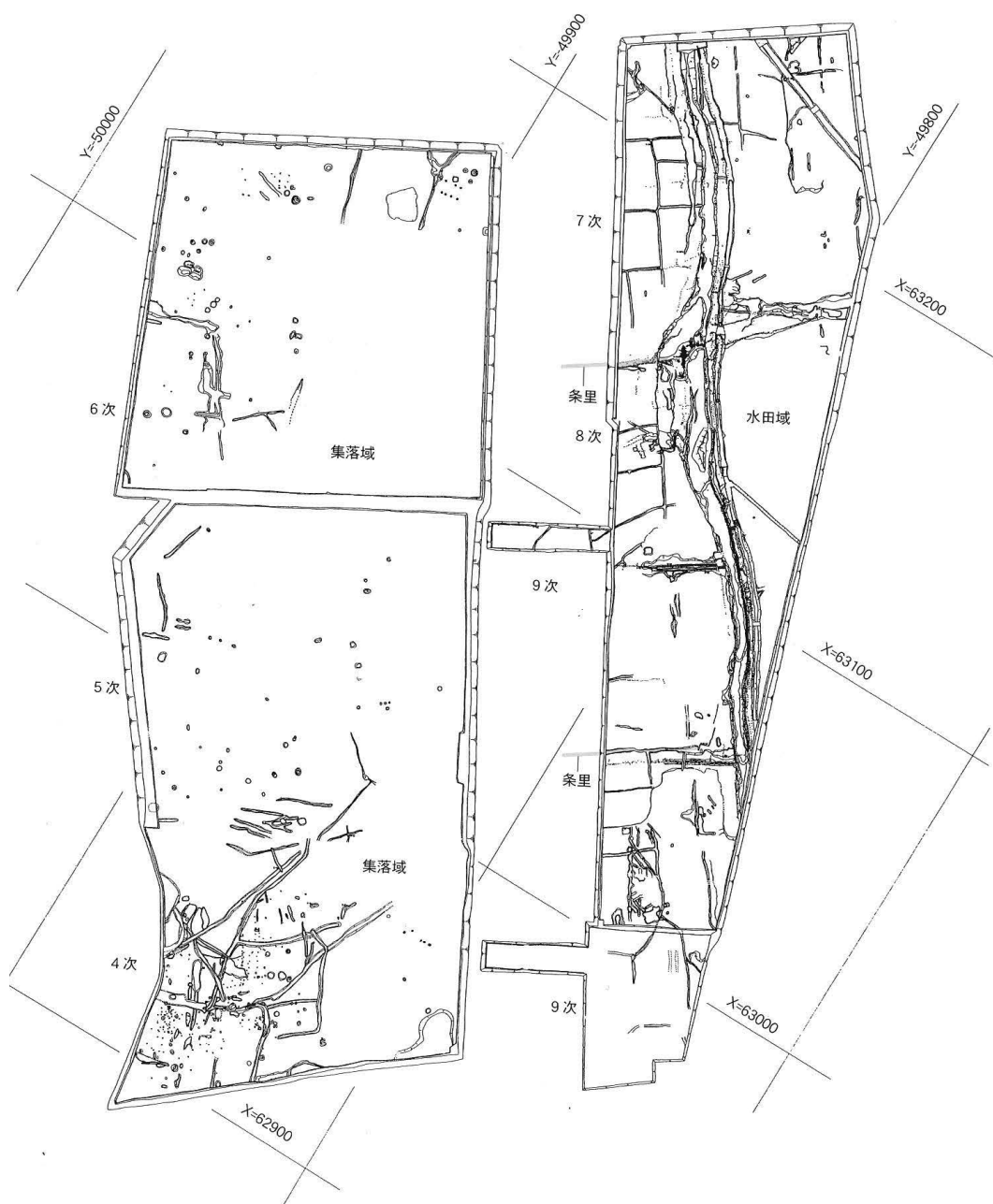


図9 下月隈C遺跡中世遺構面  
[福岡市埋蔵文化財調査報告書 932集所掲]

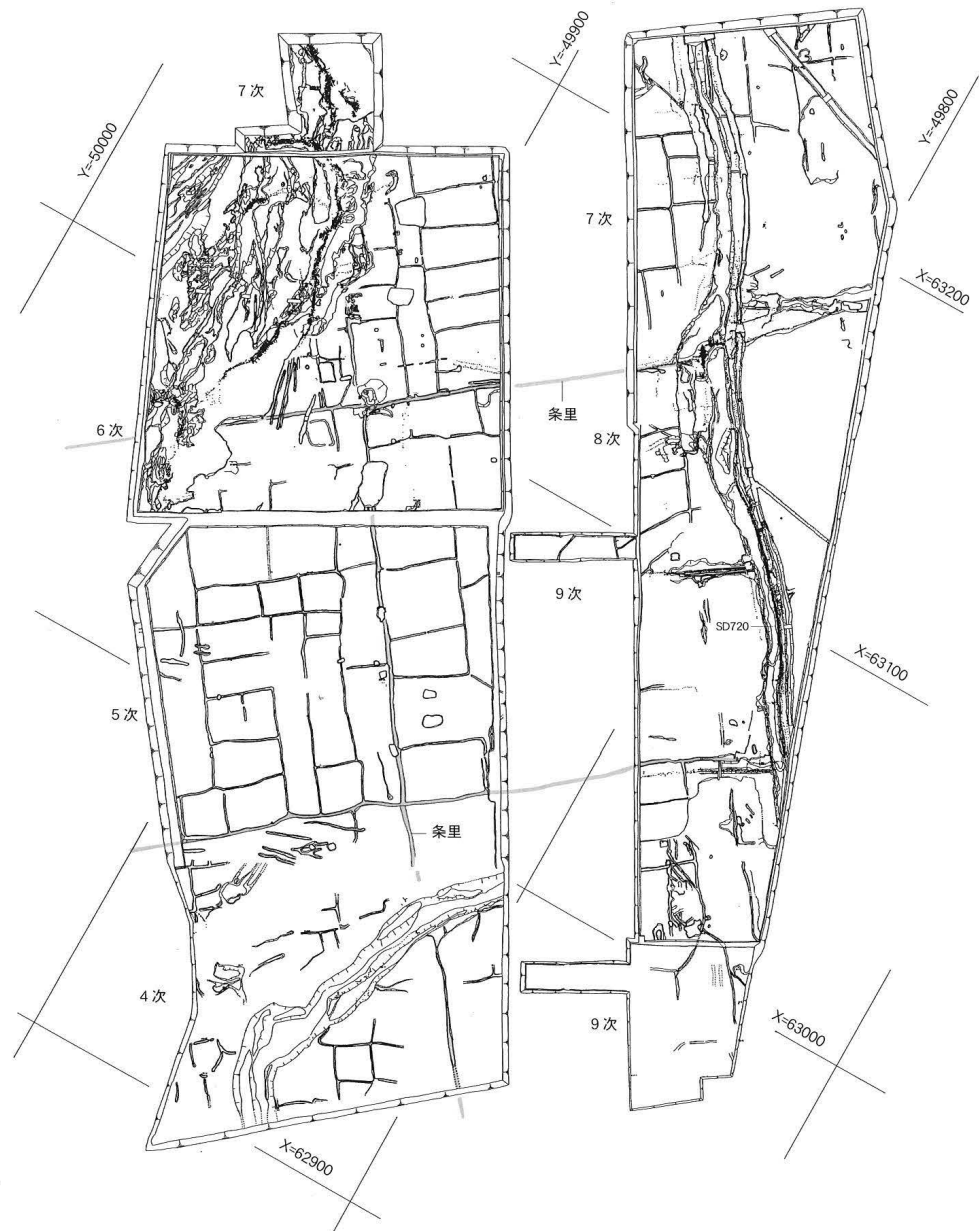


図 10 下月隈C 遺跡古代遺構面

[福岡市埋蔵文化財調査報告書 932 集所掲]

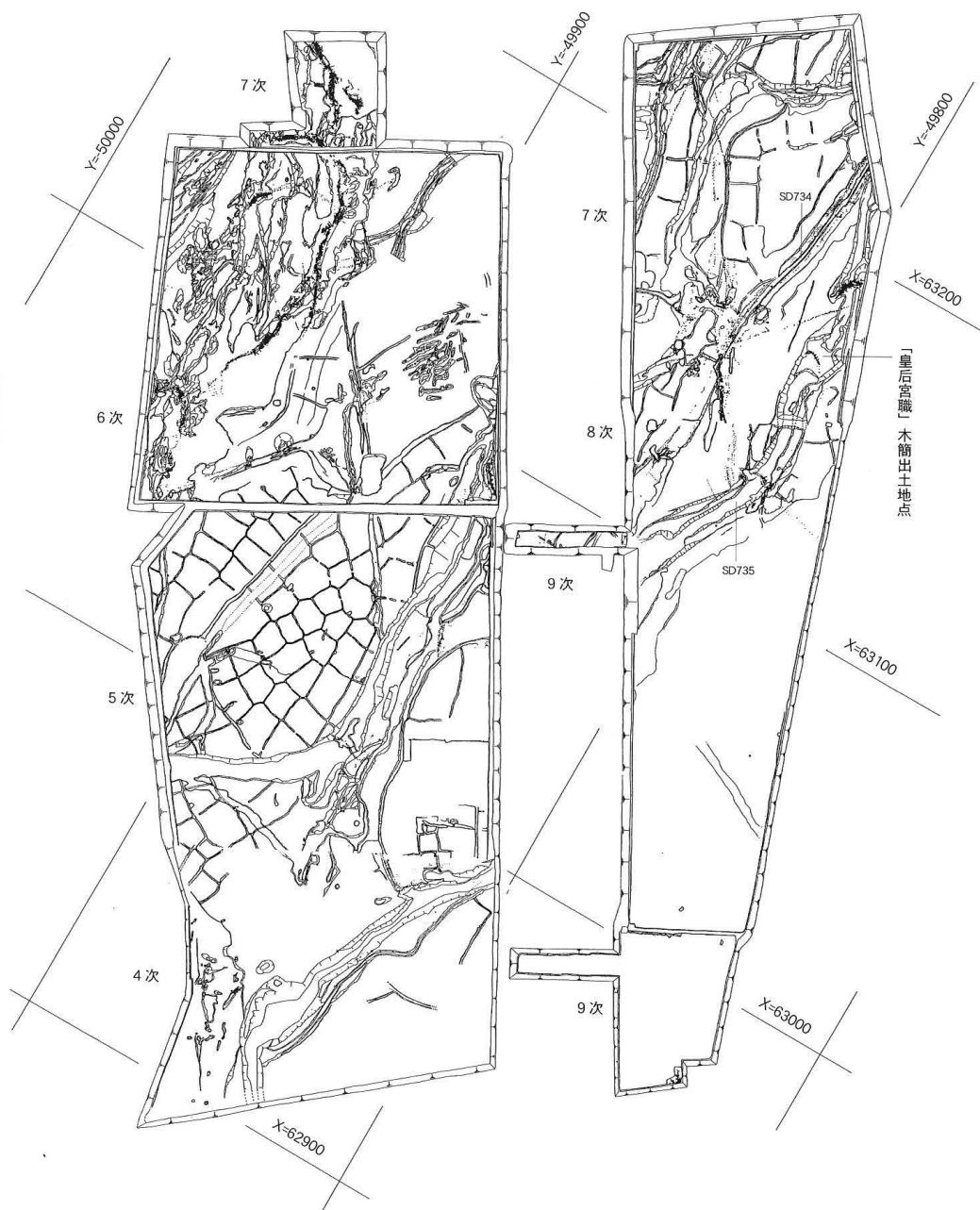


図 11 下月隈 C 遺跡古墳時代後期～古代前期遺構面  
[福岡市埋蔵文化財調査報告書 932 集所掲]

査区の大半が厚い砂層に埋まり、南端の一部のみがすぐに復旧して経営された、一方、西半ではこれ以前にも洪水があったが、それは直後に旧畦畔を活かしつつ復旧された、ということになる。なお、上層水田面の畦畔の方位は、条里の方向に極めて良く一致しているという〔同前 102 頁〕。

8 世紀後葉の洪水の後、直後に復旧された東半南端部以外でも再び水田化されたが、その時期は直接には不明である。ただ、東半南端部の直後復旧面の上にも砂層が容易に検出されている。一方、西半洪水面のすぐ上にもう一枚ある洪水砂層、および更に上の洪水砂層によって弁別できる、比較的古い時期の（つまり時期の近接した）水田面があり、さらにその 0.5～1 m 上に、第 1 期の集落面（とそれに伴う水田面）が検出されることになる。

**2003** 下月隈 C 遺跡の第 4～9 次調査は、福岡空港の南側に隣接する総計 80,000 m<sup>2</sup>の空き地での洪水対策用の調節池建設工事に先立つものであり、第 4 次で 6,500 m<sup>2</sup>〔750 集『下月隈 C 遺跡Ⅲ』2003 年、瀧本正志氏執筆〕、第 5 次で 10,000 m<sup>2</sup>〔795 集『下月隈 C 遺跡Ⅳ』2004 年、瀧本正志氏執筆〕、第 6 次で 10,710 m<sup>2</sup>〔839 集『下月隈 C 遺跡Ⅴ』2005 年、山崎龍雄・上角智希両氏執筆〕、第 7 次で 9,139 m<sup>2</sup>〔881 集『下月隈 C 遺跡Ⅵ』2006 年、山崎龍雄・荒牧宏行両氏執筆〕、第 8・9 次でそれぞれ 7,400 m<sup>2</sup>と 2,000 m<sup>2</sup>〔932 集『下月隈 C 遺跡Ⅶ』2007 年、山崎龍雄・荒牧宏行両氏執筆〕という広大な面積を調査している。以下、調査年次順＝報告書刊行順に、各次調査の概要を紹介したい。参考のために最終的にまとめられた遺構変遷図を掲げておいた（図 9～11）。

第 4 次調査の報告書では、先行する第 2・3 次調査区の年代観について、

古墳時代～奈良時代の水田、9～10 世紀、10～13 世紀、14 世紀の集落と水田の大きく 4 時期の遺構が発見されている。特に、2・3 次調査では越州窯系青磁碗の精製品、蛇の目高台の白磁碗、緑釉陶器皿、滑石製の榼、瓦等の一般集落からでは見られない遺物が出土していることから、9～10 世紀における集落は特権階級もしくはそれらに關係する集落と考えられ、それ以降は溝や門で画された屋敷に代表される一般集落に変容している。

と記述しており〔750 集 4 頁。なお 795 集 4 頁も全く同文であるのは、ともに瀧本正志氏執筆だからであろう〕、第 2 期集落の始まりを 200 年上げ、従って第 1 期集落の時期を 9～10 世紀に絞り込んでいる。その経緯・根拠は不明だが、あるいは立花寺 B 遺跡の年代観と合わせようとしたものであろうか。

第 4 次調査では、基準とする遺構検出面を 4 面とし、第 1 遺構検出面は中世、第 2 遺構検出面は奈良時代～平安時代前半期、第 3 遺構検出面は古墳時代、第 4 遺構検出面は弥生時代に設定された。以下の紹介では、基本的に古墳時代以前については省略する。

地表下 1 m 程に第 1 遺構検出面があり、灰褐色砂質土層に溝・土坑・柱穴・組み合わせ式の井戸などが検出されたが、屋敷などの区画性は認められなかった。第 2 遺構検出面では条里と同一方向の畦畔・足跡、水田面を切るらしい調査区を斜行する大規模河川がみつき、河川からは須恵器・土師器の日常雑器多数が出土した。第 3 遺構検出面では、第 2 面の水田とは大きく方向が異なる畦畔・水田が検出され、弥生時代後期～古墳時代初頭の土器溜まりもみつかった。第 4 遺構検出面では建築部材を再利用した井堰などが出土した。〔750 集 9 頁〕

このうち、第 1 遺構検出面の溝・井戸・土坑からは、土師器、須恵器に加えて、越州窯青磁碗、

白磁碗、平瓦・丸瓦などが出土している〔同前 38～9 頁〕。

第2遺構検出面である水田は、

調査区全面で検出したが、良好な状態で畦畔が残存していたのは南辺部中央と北西部である。その大半は洪水等の影響により水田が流失した結果と推定される。このため、水田規模や土地区割りなどは明らかにすることはできなかった。調査区東半部中央には水田畦畔とは異なる大規模な畦畔が南東－北西方向に位置する。水田はこの大畦畔にほぼ並行および直交する位置関係にある畦とによって区画されている。このため水田の平面形は方形もしくは長方形を呈しているが、総じて整然とは区画されていない。

という〔同前 26 頁〕。水田覆土中からは、奈良時代の土師器・須恵器、古墳時代の須恵器の坏、弥生土器の甕・高坏等が出土しているが〔同前 26～28, 45 頁〕、それより新しいものは出ていない。

第3遺構検出面の水田は、第2遺構検出面の直下にあり、覆土中より弥生土器や須恵器等が出土している〔同前 28・46 頁〕。

第4遺構検出面については省略するが、実はこの面からの木製遺物出土が傑出しており、本報告書全体の小結としては、「出土遺物量は集落規模を反映するものとする、低地におけるピークは縄文時代晩期末（弥生時代早期）、弥生時代中期、弥生時代後期後半～古墳時代初頭、奈良時代～平安時代前期、12～14世紀に求められる。さらにピークにも差異があり、弥生時代後期後半からの状況は他の時代と比較すると突出し、爆発的増加とでも表現され、低湿地における本格的集落の出現を知る」〔同前 227 頁〕とされたのであった。なお、第5次調査の報告書では、「（第4次調査の）発掘調査では上層から平安末～鎌倉時代の集落、奈良～平安時代の水田・水路、古墳時代の水田・水路、弥生時代後期～古墳時代初頭の集落・堰・水路、弥生時代前期の水路の遺構の他に土器・木製品・建築部材をはじめとする多量の遺物が出土した」〔795集8頁〕とまとめられ、年代観がやや曖昧にされているように見受けられる。

水田面についてより詳細には、第4次調査の報告書では、

今回の調査では、第2と第3の各検出面で水田を検出したが、本来は多くの水田が存在していたものの御笠川の氾濫によって流失したと考えられる。第2検出面の水田 SX85・86 は、調査区の東部に他の畦とは規模が異なる大畦畔が南東から北西方向に走り、大畦畔に沿って小畦で長方形や方形の平面形に区画された水田が展開する。明らかに条里制に基づく水田で、大畦畔は坪の境界を示すものである。水田1枚の面積は一定しておらず、当初の水田が分割されたものと思われる。営農期間については、出土遺物などから奈良時代前半～平安時代前半期を推定されるが、出現期がやや新しくなる可能性も残る。第3検出面の水田 SX89・98 は、畦畔の方向が上層の水田とは異なり南北方向を呈している。この方向は流路と同じであることから、水田開発が地形に影響されたものであることは明白である。なぜならば、水田経営にとって最も重要なことは水の安定的確保と供給であることから、畦越しの受・排水方法（水掛り）を用いて効率的に行うには水田を等高線に並行する位置関係に造る必要があるためである。営農期間については、弥生時代までは遡らず、古くても古墳時代前半期が推定され、基本的には古墳時代後半期以降の所産であると考えられる。月隈・平尾丘陵に展開する古墳群の被葬者に関連

すると考えられる。

と結論づけている [750 集 227～8 頁]。ここで問題にしたいのは、①第2 遺構検出面の水田の時期と、②これが埋まった洪水の程度、③及びその復旧状況であるが、土層の断面観察が示されていないので、②と③は知りようがない。①については、「奈良時代前半～平安時代前半期を推定されるが、出現期がやや新しくなる可能性も残る」とされているその根拠が明らかでない。覆土中から出土した遺物については、前述のように報告書中では奈良時代とされているものばかりなので、このままでは奈良時代末までに洪水で埋まった水田面としか考えられず、「平安時代前半期」というかなり幅広い時期設定が出てくる根拠が分からない。総じて、第4 次の報告書では第2・3 次の報告書の遺構検出面・水田面との関係が、——直接繋がった現場ではないこともあろうが——曖昧に処理されているように見受けられる。

**2004** 第4 次調査区の北隣を発掘した第5 次調査での遺構検出面は「5 面を数え、各遺構検出面における時代認識は第1 遺構検出面が平安時代後期～鎌倉時代、第2 遺構検出面は奈良時代～平安時代前半期、第3 遺構検出面は古墳時代後期、第4 遺構検出面は弥生時代後期～古墳時代初頭、第5 遺構検出面は弥生時代早期～前期である」[795 集 9 頁]。地表下1 m程で暗灰白色砂となり、水田畦畔が顔を出す。調査区西北隅で平安時代後半期と考えられる南北に流れる河川を検出。第1 遺構面検出では、大小の畦畔で碁盤の目に区画された水田跡が調査区全域に広がり、地割りが崩れた様相を見せるが古代条里の痕跡を留めている。ただし、水田面の上層遺構が残存していたため、これを第1 遺構検出面とし、水田面を第2 遺構検出面とした。第3 遺構検出面においては、上層水田とは形状が完全に異なる水田と水路・堰を確認している [同前 9 頁]。

第1 遺構検出面の河川からは龍泉窯青磁碗も一点出土しているが [同前 11・42 頁]、ふつうの土師器・須恵器も土坑・井戸・溝から出土しているほか、土坑墓も見つかっている。ただ、副葬品は土師器の皿であった [同前 13 頁]。この面の井戸から出土した瓦質土師器の甕に詰まっていた炭化物を放射性炭素年代測定したところ、AD1,160～1,245の結果を得た [同前 42 頁]。

第2 遺構検出面は、洪水の影響で一部の畦畔が流出したものの、調査区全面に良好に残された水田である。この水田面の大畦畔は、4 次・6 次で検出された大畦畔と同じ方向を持ち、かつ第6 次の調査結果とあわせるとちょうど109 mの間隔で大畦畔が設けられていることが判明するので、まさしく条里の施行された痕跡と言える [同前 18 頁]。この水田面の覆土の灰色～白色砂中からは、須恵器杯・蓋・甕、土師器碗・小皿・高坏、白磁碗2 点、弥生土器甕、移動式竈が出土している [同前 45 頁]。

第3 遺構検出面は少なくとも2 時期以上の複数の遺構面が混在している。遺構は大小の畦畔で区画された水田とその水田を流出させた河川・溝・流路からなる [同前 20 頁]。河川からは須恵器杯・蓋・甕、弥生土器甕・高坏・甗その他、石包丁、石製紡錘車、石剣、石斧、製塩土器等が出土している [同前 20・47 頁]。溝からは一点だけ貨泉が出土しているが [同前 112 頁]、出土遺物の中心は須恵器・弥生土器であり、杭列で補強された溝も多い。また、その溝によってところどころ壊された、大畦畔と小畦畔が走る水田面が広範に広がっている [同前 25 頁]。水田覆土（砂）からの出土

遺物も弥生土器、須恵器である〔同前 55 頁〕。

結局のところ第5次調査は第4次調査の検証と位置づけられ、要点の一つ、時代的変遷については、「本地における時代的変遷は、第4次調査報告（下月隈C遺跡Ⅲ 福岡市埋蔵文化財調査報告書第750集）と基本的に変わってはいない。加えるならば、①明確な遺構の検出には至らなかったが、出土遺物などから弥生時代前期の集落が極めて近辺において存在する確証を強めた。②古墳時代後期には大規模な水田が展開している。③調査区北西隅の河川の氾濫によって平安時代前半期には水田が流出した可能性が高い。④12～14世紀の集落の範囲が想定よりもより北側に広がっている」〔292頁〕とまとめられた。第4次と第5次は、担当者が同じなので、同様のまとめ方になるのは自然であるが、「平安時代前半期」の水田流出と12世紀との間をどの程度の期間と見積もるか、曖昧なまとも言える。

**2005** 第6次調査では、第5次調査区の更に北隣を発掘した。調査地はそもそも「御笠川東側の低地部の、水害を受けやすい地域であったため、その対策事業の一環として」〔839集1頁〕調節池が計画されたとある。8世紀以降の当該地域の歴史的環境について、第6次調査報告書の冒頭では、大略以下のようにまとめられている〔同前5～6頁。山崎龍雄氏執筆〕。

- 下月隈一帯は、律令時代には<sup>むしろだ</sup>席田郡（和名類聚抄によれば、石田・大国・新居の3郷からなる）に属していた。郡内の西側には水城東門に到る官道（西海道）が走り、延喜兵部式によれば郡内に<sup>くに</sup>久爾駅が置かれていた。駅家の遺跡は見つかっていないが、大国郷にあったとする説が有力で、それは旧席田村の月隈あたりと推定されている。
- 月隈という地名の起源について古今著聞集には、寛治8年（1094）に権帥源経信が大宰府に赴任の途中、筑前国筵田駅で観月の宴を催した際、館にあった楓の巨木が妨げになるので切らせたので「月隈」と名付けたとある。ここでいう筵田駅は久爾駅のことであろう。
- 『平安遺文』158・160・162号（157・161号も関連する一坂上）によれば、貞観10年（868）に席田郡にある観世音寺領と故高子内親王家領から内蔵寮領となった博多荘が混在しているとして、観世音寺と内蔵寮との間に相論が起り、大宰府田文所は仁寿2年（852）の席田郡班田図に基づいて検田している。このことから席田郡が中央権門と何らかの関わりがあったことが考えられる。
- 当該期の遺跡としては、周辺に立花寺B遺跡や井相田遺跡（大野城市の仲島遺跡）、立花寺遺跡（平成12・13年度の調査では飛鳥～奈良時代の柵や大型建物などが検出されている）、雀居遺跡などが存在する。官道跡と思われる道路状遺構は、御笠川西側の高畑遺跡、<sup>な かふんきゅう</sup>那珂君休遺跡などで確認されている。
- 南北朝時代～室町期には、大宰府安楽寺の席田荘が置かれた。

下月隈C遺跡の報告書の中で、平安時代の文献史料に触れたのはこれが初めてで、以後この記述が年次的に最も新しい932集まで踏襲されるのは、すべて山崎龍雄氏の執筆にかかるため当然である。

さて第6次調査では、「前年度の調査結果を基に、当初第Ⅰ面古代（奈良～平安）、第Ⅱ面古墳時代後期、第Ⅲ面弥生時代の3面の調査を予定していたが、第Ⅰ面上に中世前半（平安末～鎌倉時代）の遺構面が検出されたので、中世を第Ⅰ面として4時期の面について調査を実施した」[同前 9～10頁]。「遺構面の深さについては調査区東壁で、第Ⅰ面は、掘削委託で表土下0.8mまで掘下げたので、第Ⅱ面水田面上の洪水砂上。第Ⅱ面は表土から-1.1m前後の面。第Ⅲ面は-1.3～1.7mの深さで、第Ⅱ面との間層に砂などを挟む。第Ⅳ面は深さ-1.7～2mであり、Ⅲ面との間に黒色粘土の包含層を挟む」[同前 9頁]という。

第Ⅰ面では、古代の水田埋没砂上に中世の井戸・溝などを確認、次いで、場所によっては洪水砂が厚く堆積しているのを重機で掘削しつつ条里水田面（第Ⅱ面）を検出、その下の第Ⅲ面は古墳時代の水田面で、西側の河川部分には水田がないが、護岸杭列や堰を検出した[同前 9～10頁]。Ⅳ面以下は省略に従う。

より詳細に第Ⅰ面と第Ⅱ面とを見ていこう。古代の水田を埋めた粗砂上面（西側では旧河川上面）に井戸・溝・ピットが確認されたので、これを第Ⅰ面とした。掘立柱建物も1棟検出したが、もとも中世の遺構面を予想していなかったもので、飛んでしまったピットもあっただろう。9条検出された溝状遺構からは、墨痕土器、11～12世紀前半の皿・坏、11世紀後半～12世紀前半の白磁碗片、その他、これより古い土器類も出土している。16基検出された井戸からの出土遺物も、古代後期～中世前期のものであるが[同前 13～15頁]、中には出土した土師器碗の形状から9～10世紀と見られる井戸もある[同前 18頁]。土坑の出土遺物も、8世紀の土師器皿、11世紀の土師器碗、香川県十瓶山窯産と思われる11～12世紀の中世須恵器などが混在している[同前 29～30頁]。このように、弥生土器、古墳時代～古代の土師器等が、中世前期の土器に混じってある程度満遍なく出土しているので、この遺構面の年代としては11～12世紀と考えるのが穏当であろう。

第Ⅱ面では、縦横の直線的な畦畔で四角形に区画され、条里地割をよくとどめた古代（8～9世紀）の水田面と、これと同時期で100m以上の護岸杭列と堰を伴う河川流路跡とを検出した。この杭列に引かかる形で人形・斎串などの木製祭祀具が10点程度出土している[同前 40頁]。

水田面は第Ⅰ面以下の砂層を剥いだところから容易に検出されたが、西南部については、あるいは直上にもう一面あったのかもしれない[同前 41頁]。問題なのは、この水田の廃絶時期であるが、本報告書[839集]では下記のように丁寧に状況を分析し、仮説を提示している。

水田面から出土した遺物は、当然ではあるが非常に少なく細片がほとんどである。これらの遺物は、御笠川の氾濫により水田面上に堆積した砂層内から出土したもので、水田の廃絶時期を示す。ただ、河川の氾濫時期とは必ずしも一致せず、それより古い時期の遺物も入っている。水田面出土遺物が示す年代は8世紀中頃～後半である。一方で、水田面の北西側には畦畔と斜交する方向に護岸杭列SX395が築かれている。このことは、河川流路を検出した調査区北西部にも、元来水田が続いていたことを暗示している。その水田がある時期に河川により削られてしまい、それを防ぐために護岸施設を築造したと考えられる。水田の廃絶はたった一度起こった大規模な河川の氾濫によってもたらされたのではない。河川流路の変化により徐々に水田が侵食されていく過程で、住民は護岸施設を築くなどして水田の維持に努めたようだ。いま見る長大な護岸施設は複数回の治水上事が累積した姿のようである。河川の氾濫に悩まされ

ながらも必死で水田の維持に努めた住民の姿を想起させる。しかし、そのような長期にわたる自然への抵抗もむなしく、やがて、水田面は厚い砂層で覆われ、住民は水田を放棄せざるを得なかった。水田を守るために築かれた護岸施設からは8～9世紀の遺物が多く出土している(Fig. 37・38)。よって、水田面出土の遺物は8世紀代のものを主体とするが、水田の廃絶時期は護岸施設 SX395 出土遺物が示す9世紀ごろと考える。水田廃絶後は第Ⅰ面に見るように、早くも9世紀のうちに井戸が掘られ、その後は集落が形成されている。[同前 41～42 頁]

また、護岸杭列については、以下のように説明されている。

護岸杭列内および付近から出土した遺物は9世紀代が主体で、8世紀の遺物もかなり含む。護岸杭列の築造は9世紀頃と考えている。人形、斎串等の祭祀に関する木製品が出土した点が注目される[同前 44 頁]。

供膳形態の土器を見ると土師器のほうが須恵器よりも相当に多いこと、内外両面を焼した黒色土器 B 類や瓦器を含まないことから、護岸杭列の築造時期は9世紀代と考えている[同前 50～53 頁]。

こうした時期判定を承け、第6次調査の成果は以下の①～③のようにまとめられた[同前 255 頁]。

#### ①第Ⅰ面のまとめ

第Ⅰ面は中世前期である。溝・建物・井戸・土坑などから構成される集落遺構であるが、調査の経緯から十分な調査は出来なかったため、遺構の全容については十分に把握出来たわけではない。古代の埋没した水田や川跡上に形成された集落である。井戸や溝、土坑など遺構の時期は11～12世紀のものが主体で、集落の継続期間はそれ程長くはない。集落の開始は井戸 SE311 が10世紀に先行する時期であり、第Ⅱ面の川や水田の埋没時期が9世紀頃と思われるので、その頃一度か数度かは分からないが、地形が変わるほどの洪水を受けて水田や川が埋没した後、当地が微高地化して水田として再利用されることなく、其処に集落が営まれていたことが考えられる。この時期の水田は東側の第7次・8次調査区で確認されているので、第6次調査区が自然堤防状に微高地化した結果、東側が低地化し、水田が営まれたものと思われる。地形が改変するほどの洪水が何時頃起きたのであろうか。(中略)九州についての記述は少なく9世紀天安2(858)年の『日本文徳天皇実録』の記録(6月20日条の「大宰府言、去五月一日、大風暴雨、官舎悉破、青苗朽失。九国二島、尽被損傷」を指す——坂上)、貞観11(869)年の『三代実録』(10月23日条の「勅曰。……如聞、肥後国迅雨成暴」を指す——坂上)の記録と2回記録されているのみであるが、この2回の記録は中央の記録に残る程なので、かなり大規模な災害であったと思われる。

#### ②第Ⅱ面のまとめ

古代8～9世紀の条里水田とそれを切る河川流路跡と護岸遺構を検出した。河川流路跡については空中写真を見ると何条かの流路跡が認められ、度々洪水によって流路が変更していたことが読み取れる。条里水田は日野氏の席田地区の条里復元図にほぼ一致する。しかも十字の交

差する大畦による坪境が検出されたことが大きな成果である。(中略)川跡内で検出された護岸状遺構は長さ100mを超える大規模なものである。これを構築するにはかなりの労働力を必要としたであろう。杭内で出土した須恵器などが、9世紀前半頃のものであることからそれ以前に構築されたものと考えられる。場所場所で築造法が異なるところもあるので、洪水に見舞われ破損する度に、改修されたものと思われる。使用杭材を見ると広葉樹が多く、樹種も雑多で周辺で容易に入手出来たものである。川跡内では堰跡も検出されているので、ある時期の流路では周辺水田に水を取り入れていたのであろう。また護岸遺構を中心に人形や斎串などの木製祭祀具が出土しており、北側第7次調査区での遺構の続き部分でも同様の遺物が出土している。律令期での地方での木製祭祀具による水辺での祓い祭祀を考える上で、興味深い事例と考える。

### ③ 第Ⅲ面のまとめ

第Ⅲ面は古墳時代後期から古代前半期の時期の水田跡を検出した。この面で検出した高所部の水田SS410・424間の南北方向に延びる畔と溝は第Ⅱ面で検出された席田郡の条里地割方向に近いものである。(中略)当地周辺の地割は大宰府の水城大堤を基準とするものであり、水城は天智天皇三年(665)に築造されたことから、古くてもその時期を遡らないといわれている。SD396から8世紀前半の須恵器坏54が出土していることや、水田SS410・424などの埋砂から7世紀後半から8世紀前半の須恵器が出土しており、上限時期が想定できる。席田郡の条里制地割の開始時期を考える上で一つの手がかりとなろう。第Ⅲ面検出時に中間層で上面に近い畔を取る水田が確認されており、水田面が複数あった可能性がある。しかし南側低地部で検出された水田SS192や200は条里地割に沿わず、むしろ地形に規制された形態であるので、継続時期に時期差が考えられる。この水田面は東側をSD190で切られているので、量はそれ程多くはないがSD190が6世紀末頃までの須恵器、SX389が7世紀までの須恵器を含むので、特に下層水田はそれ以前となろう。第Ⅳ面は新しくても5世紀初め以前であり、水田の開始はそれ以後となる。SX389は堰の可能性もあるが、SD190の水流を確定するための築造された護岸堤防と考えられる、同様の遺構は第Ⅱ面でも検出されたが、洪水が恒常的に襲い、流路の変更が絶えなかった当時においては、水の管理が大切なことであったのであろう。杭中に7世紀後半の須恵器が少量ではあるが出土しており、構築時期に近いものか。

このように、第6次調査の報告書は、文献史料をも利用しつつ、下月隈地区の景観の推移について検討したもので、意欲的な報告書と認められる。しかし、上のようにまとめられた概要のうち、第Ⅲ面以下については、首肯できるところであるが、第Ⅰ・Ⅱ面の年代観には、いくつかの問題があるように思う。

第一。この調査区の東壁においては、第Ⅰ面と第Ⅱ面との間に約30cmの標高差があり、これは基本的に砂層、つまり洪水砂である。水田面はこの洪水砂によって埋められているのであり、最終的に第Ⅱ面を埋没させたのは、この一度の大規模洪水と考えざるを得ない。それより前にも何度か洪水砂に覆われ、これが復旧されたことはあったかもしれないが、その努力は、この第Ⅱ面の下に痕跡をとどめるべきものだろう。その第Ⅱ面の上で検出された遺物がいずれも8世紀に収まるの

であるならば、その水田は8世紀中、遅くとも9世紀初頭に埋まったとしか言えないのではなかろうか。9世紀と推測した根拠の一つである「土師器のほうが須恵器よりも相当に多いこと」は、ここが祭祀の場であったことで説明できるのではないか。また、河辺の祭祀の場で「黒色土器B類や瓦器を含まないこと」は、その場が平安時代後半に降らないという以外に、時期判定上どの程度有効なのだろうか。

第二。第Ⅰ面で検出された井戸から9世紀の遺物が見つまっていることから、9世紀のうちに集落が形成されたと言えらるのだろうか。第Ⅰ面で検出された遺物の大半が11～12世紀のものであることは上述した通りである。溝状遺構からの出土のような生活痕がすべてこの時代であることは、集落の時期もこの時代を中心に考えるべき事を示している。そもそも30cm前後の洪水砂に覆われたところに、すぐに集落ができるものだろうか。稲作等の生産の場は、仮に東側に求められたとしても、場所によっては30cmの洪水砂が積もっている上に、直ちに水田が営めるものだろうか。また、掘られた井戸の中から9世紀の遺物が一片見つかったことから、その井戸が9世紀に掘られたとまで推定できるかも問題だろう。

このような疑問を払拭できない以上、第Ⅱ面と第Ⅰ面との間に、同じ「9世紀」を媒介に連続性を求めるのには躊躇せざるを得ない。むしろ単純に、8世紀末～9世紀初頭に大洪水で埋まった水田面は、その後200年程度は氾濫原として基本的には放置され、そこに再び生活が営まれるのは、基本的には11～12世紀である、と考えた方がわかりやすい。少なくとも全面的に条里に則った水田面が展開し、それが11～12世紀まで続いたとは言えないのではなかろうか。つまり、御笠川右岸の低平地は、9～10世紀の間、かなりの程度荒廃していた可能性が否定できないのである。

**2008** 第7次調査は、「皇后宮職」と記された木簡が出土したことで脚光を浴びたものであるが、ここではこれまでの例に従い、遺構面の年代観、景観の復原への言及に絞って報告の概要を紹介したい。

第7次調査区は調整池造営のための調査区全体の北東部分と、第6次調査区から北側に張り出した部分の二つに分かれている。このため、北東部分を第1区、第6次調査区の北側を第2区とした。第1区では第Ⅰ面古代末から中世（平安後期～中世）、第Ⅱ面古墳時代後期から古代前半、第Ⅲ面弥生時代から古墳時代前半の3面を調査し、第2区では第6次調査区からの続きの古代河川跡と堰・護岸杭列の調査を行った。第1区では第6次調査区で見られたような、明瞭な中世の遺構面が東側に部分的に残るのみで、第6次調査区の第Ⅱ面と重なる。

遺構面の深さは第1区では調査区東壁において第Ⅰ面は地表から-0.9m、第Ⅱ面は-1.5～-2m、第Ⅲ面は-1.6～-2.8mの深さで、それぞれの層の間には洪水砂などが挟まる。第Ⅲ面は一部地山面上面の包含層上で遺構を検出したため、その調査後、重機で包含層を掘下げ、地山面遺構を確認している。第2区は-1.6mで、洪水砂で厚く覆われていた〔881集9頁〕。

第1区の第Ⅰ面は、古代末期から中世後期のもので、東から南側が高く、北西側が低い。従って南東側の遺構は残りが悪く、北西側にかけて、厚い洪水砂の下から、溝状遺構8条、水田面、堰跡1基を検出した〔同前13頁〕。比較的大きな溝SD720の東西で、洪水砂に覆われた3区画の水田面を確認したが、いずれも席田郡の条里と方向が一致しており、またSS704の一面は時期的にや

や新しく、SS 710 と SS 721 は、SS 704 より下層の水田とみた。SS 710 を埋めた砂の中から弥生土器、古墳時代の土師器、中世の土師器（13 世紀末～14 世紀半ば）、須恵質土器（12 世紀末～13 世紀初め）、陶器などが少量出土しており、遺構の時期は確定が難しい。中世前期頃が多いが、上限は畔の内から出土した 9 世紀前半と判断される土師器碗で、これが水田の開始の上限を示すものだろう。SS 721 の水田面からは、弥生土器、古墳時代～古代の土師器・須恵器、中世土師器、輸入陶磁器の白磁・青磁などが出土しているが、基本的に中世（11 世紀後半～13 世紀）の遺物が多く、9 世紀前半の須恵器皿片をも含む。この水田面を埋めた砂は、SD 720 の氾濫によるものであろう〔同前 30～31 頁〕。

続いて、第Ⅰ面を約 80 cm 下げ、古墳時代後期（6 世紀後半）から奈良時代（8 世紀後半）を中心とする時期の遺構（第Ⅱ面）を検出した。第Ⅱ面の状況は、以下のように報告されている。

○地形的に第Ⅰ面で確認されたように北西方向に傾斜し、北半部を中心に水田の畦畔等の施設が洪水砂に覆われた状態で良好に残る。南側ではこの検出面の下限となる 8 世紀後半に洪水砂で埋もれた SD735 が検出された。蛇行した流路内の 2 箇所には井堰が検出され、木簡や墨書土器が出土した。木簡は「皇后宮職」が記載された注目すべき文書木簡で、この地の歴史的背景を考察する上で貴重な資料となった〔同前 39 頁〕。

○調査区西側から北側にかけて検出された流路や畦畔は北側で大きく東側へ方向を振る近似した方向をとる。出土遺物からみた時期は 6 世紀後半が下限となっている。この中で水路 SD746 を横切って築かれた堤の切所の修復に近世において「屏風倒し」と呼ばれる基礎工事がみられた。この遺構の時期は 8 世紀代とみられ、先の SD734 同様に真北に近い方向をとる。従って条里地割りに則した畦畔が構築されるのはこの第Ⅱ面より降った時期であり、第Ⅰ面で検出された 9 世紀代の条里地割りの畦畔に変遷していく間に大きな変化があったものと考えられる〔同前 39 頁〕。

ここで注目されるのは、第 7 次調査区の 1 区の第Ⅱ面においては、流路と畦畔が条里地割りとは違っているという指摘である。先ほど見たように、第 6 次調査で検出された第Ⅱ面の水田は、条里地割りに則っているので、同じ面でも場所によって畦畔のありようが異なることを示している。なぜ異なるかという点については、畦畔と水路とが同じ方向に走っていることが着目される。すなわち、ここでは調査者も言うように「畦畔はほぼ流路の方向に平行したもので、地形に合わせ区画したものである」〔同前 68 頁〕。

更に注目すべきは、第Ⅰ面の水田が、第Ⅱ面の水田の畦畔を踏襲していないことである。第Ⅰ面と第Ⅱ面との標高差 80 cm（場所によるが）の中には、第Ⅰ面の最終耕作土層が含まれていたはずだが、その下に「断面から第Ⅰ面から第Ⅱ面までの間層に剥ぎ取り時は認識できなかったが砂層にはさまれてグライ化したシルト層が堆積していることが判」ったとあるので〔同前 39 頁〕、実際には第Ⅱ面の後、第Ⅰ面までの間に、何度か水田化と洪水とが繰り返されたものと推測できる。その下にある第Ⅱ面の水田面も水路も、厚い洪水砂に覆われているわけで、第Ⅰ面の水田を造営する際には、第Ⅱ面の畦畔を意識したり、踏襲する必要は全く無いほどに地形が変わったことを推測させ

る。第Ⅱ面を覆った問題の洪水が8世紀末～9世紀初頭で、その後も何度か水田化と洪水とが繰り返され、第Ⅱ面の地割りに「大きな改変」を加えて第Ⅰ面の畦畔が作られたのが、畦畔の中に埋もれていた土師器の年代観から推して9世紀前半であるというのでは、あまりにも間隔が短かすぎるように思われる。そもそもまた、9世紀前半に作られた畦畔が、11～12世紀までそのまま保持されたというのも、疑問と言えよう。

さて、第Ⅱ面に属するSD 735からは、「成」「戌」「香」「公」等の墨書土器や斎串とともに木簡が出土した。SD 735の出土遺物は、基本的に8世紀半ばから後半にかけてのものであった〔同前 50頁〕。こうした個々の出土遺物、検出された遺構を総合して、第Ⅱ面の年代観が以下のようにまとめられている〔86頁〕。

第Ⅱ面で検出された遺構は大きくその水路時期から3時期に分けられ、SD 746（古）→SD 734→SD 735と変遷していくものと考えられる。その時期は「皇后宮職」の木簡が出土したSD 735の埋没時期が8世紀後半に下限をおさえられることは確実である。SD 746も既述した通り、その切り替え時期が8世紀後半に下限をおさえられる。しかし、それに付随した畦畔が遺物から6世紀後半代に下限がおかれる洪水流路に切られているのでそれ以前から機能していたことが考えられる。従って、その形状は長く存続し、SX 773（屏風返し）による水路の切り替え後も維持していたとみられるので、その基本的な区画形態は200年に及んで続いていた可能性がある。

中央部を北流するSD 734はその方向から畦畔を切っていると考えられ、降った時期に構築されたものとみられる。延長方向からみるとSD 735への排水も考えられる。上層にSD 735の洪水砂を被るがその埋没時期まで存続していた可能性がある。また構築時期がSD 746の廃止に伴うものか、または併存したものか判断が難しいが、SD 746が切り替わった時期が8世紀代に及ぶことを考え合わせれば併存していた可能性は十分ありうると思われる。その場合、4次から9次調査の全体図（P.88に掲載）にみられるようにSD 743とSD 734は概ね平行し、畦畔はSD 746に合わせ地形的な制約を受けながらも東側では方形区画をとるべく幾分地形的には大きな労力を用いて改変した可能性がある。このような地形的な制約と意図的、計画的な要素をあわせもった畦畔は次の来たるべき時代、いわゆる第Ⅰ面で検出された条里に基づく地割りを準備させるものではないかと思われる。

第Ⅲ面は、第Ⅱ面より更に0.1～0.8m下げた面で、遺物は弥生時代前期から古墳時代にかけてのものであるので〔同前 89頁〕、今は省略したい。

以上の各面の調査詳報を承けて、第7次調査の報告書での「調査のまとめ」は以下のようになった〔同前 269～70頁〕。

#### （1）Ⅰ面のまとめ

第Ⅰ面は中世の時期である。検出遺構としては水田と溝である。溝は水田に伴うもので、水利施設の堰を伴っていた。遺構の時期としては時期幅があり、古代後期（平安時代）から中世後期（室町期）までのものを検出した。西側の第4次～6次調査区ではこの時期集落（10世紀～12世紀）になっており、西側が集落部で、東側が水田部という遺構配置となる。第6次

調査区では9世紀代に洪水によって川が埋没し微高地化し、そこに集落が出現した。西側が相対的に微高地化したことによって東側の第7次・8次調査区が低地化し引き続き水田が営まれたものと考ええる。また水田は地割が崩れているものの条里制に基づいたものであり、第6次調査区で検出された坪境の大畦畔の延長が本調査区でも検出された。ただ第6次調査区では幅1m程の大畦畔であったが、本調査区では畔土が流れたのか杭列で確認された。この境の畦畔は南北を貫流する溝SD 720に続く。SD 720は第6次調査区の南北方向の坪境から凡そ1町(約109m)の間隔があき、条里制の坪境に沿っている。また内部で検出した水利施設の堰もその延長上に築かれたものであり、SD 720から東に延びる溝SD 712・713なども条里地割に規制されたものである。溝の時期は出土遺物から12世紀頃からであり、この時期に条里地割に沿って溝が掘削されたものであり、西側の集落が廃絶した後は調査地全体が再び水田となり、その後現在に続き、条里制の痕跡を残したものであろう。

本調査区で検出した水田の継続時期についてであるが、西側のSS 721が古代9世紀頃の遺物を多く含み、且つSS 710の畔の中からは9世紀代と思われる土師器碗が出土しており、本調査区での条里水田の始まりを考える上に一つの手がかりとなろう。

## (2) 第Ⅱ面のまとめ

検出された畦畔の時期は6世紀後半までは遡り、その下限は8世紀後半代にまで及ぶと考えられる。しかし、この間多くの修復や造り替えが行われたことを窺わせる遺構も数多く検出された。そのなかで、調査区西側で検出された水路SD 746を踏襲しながらも、切り替えも行い、また、畦畔も地形的な制約から脱却し、方形に近く直線的な部分が多く見受けられるようなものに造り変えていく進歩が見受けられた。これは次の条里に基づく地割りを遂行できる技術が備わりつつあったことを示しているように思われる。

また、水防に関わる畦畔や土堤の修復や築造においても近世における農法と変わらない知識と技術がそこにあった。

しかし、水田農業の大きな画期である条里地割の施行は前述の第Ⅰ面においてみられ、その時期は平安遺文にのる高子内親王にまつわる記事から9世紀前半までには遂行されていると考えられる。また、遺物にもとづく発掘調査の知見からは第Ⅱ面で検出された8世紀後半の水路SD 746の切り替え以後から第Ⅰ面の畦畔から出土した土師器との間に実施されたことになる。

その後、第Ⅰ面で検出された12世紀代に築かれた水路SD 720に基づく水利の基本的な配置が現代まで踏襲されたことも大きな画期といえる。

## (3) 第Ⅲ面まとめ

本調査面の時期は弥生時代中期～古墳時代中期までである。(省略)

## (4) 第2区のまとめ

第6次調査区の北側延長部分で、河川跡と護岸杭列SX 395の延長部分を検出したが、杭列は真直ぐに北に延びず、第6次調査区のSX 403と同じように堰が変わっていく。川の護岸

と周辺の水田に水を供給するための水利施設としての堰が築かれた状況を示すものであろう。第6次調査区のSX 403と本調査区のSX 395は同じ流れを受けて築かれているが、残りはSX 403が悪く、SX 403が洪水などで破損し使用不能になった後、本調査区に再構築されたものとする。堰が構築された時期は8世紀から9世紀前半頃の遺物が堰内外から多く出土しており、9世紀前半には構築されていたのであろう。木簡の出土したSD 735は洪水で8世紀代に埋没したと考えられることから、流路が西側第6次調査区に移動し、その後そこに堰が築かれたと推定する。

以上のようにまとめられているが、若干繰り返しにはなるが、以下のような問題があることを指摘しておきたい。

上に記しておいたように、本文では第Ⅰ面に属するSS 721の水田面からは、弥生土器、古墳時代～古代の土師器・須恵器、中世土師器、輸入陶磁器の白磁・青磁などが出土しているが、基本的に中世（11世紀後半～13世紀）の遺物が多く、この水田面を埋めた砂は、SD 720の氾濫によるものであろうとされていた〔同前 30～31頁〕。となるとSS 721の水田面は中世初期（11世紀後半～13世紀）の直前に埋まったと考えるのが自然である。問題はその水田面がいつから使用されていたかであるが、この点は「西側のSS 721が古代9世紀頃の遺物を多く含み、且つSS 710の畔の中からは9世紀代と思われる土師器碗が出土しており、本調査区での条里水田の始まりを考える上に一つの手がかりとなろう」〔同前 269頁〕と、9世紀まで遡らせる考えのようである。そうすると確かに「条里地割の施行は前述の第Ⅰ面においてみられ、その時期は平安遺文にのる高子内親王にまつわる記事から9世紀前半までには遂行されていると考えられる。また、遺物にもとづく発掘調査の知見からは第Ⅱ面で検出された8世紀後半の水路SD 746の切り替え以後から第Ⅰ面の畦畔から出土した土師器との間に実施されたことになる」〔同上〕。しかし、第Ⅰ面に残された条里にそった「溝の時期は出土遺物から12世紀頃からであり、この時期に条里地割に沿って溝が掘削されたもの」〔同上〕とされており、報告者が9世紀に遡ると考える水田面は、条里に添った溝に200年先だって造成されたことになりはしないだろうか。また、8世紀後半の洪水で西側が微高地化して集落となり、その代替として東側が水田化したと考え、この変化は8世紀後半～9世紀前半には完成していたとするが、そもそも条里プランの存在と、これを用いた地点表示と、実際の水田面の施工とは、時期が違っていても問題ないので、観世音寺領や高子内親王の所領が条里表示されているからといって、直ちに条里地割りが施行されていたということにはならない。微高地化した上に営まれた集落については10～12世紀という時期設定が提示されているが、西側が微高地化したのは洪水砂を被ったからであるというような時に、元来高かった東側を水田化する方が、集落に100年先だって行われうるだろうか、という疑問も生じるだろう。

このように、8世紀末～9世紀初頭の洪水、すなわち「皇后宮職」木簡が絡まった状態のしがらみを埋めた洪水を含む何度もの、そしてその後のかなりの規模の洪水の後に、下月隈一帯がどうなっていたか、ほとんどすぐに大規模条里の施工という形で復旧・発展したのか、それとも200年程度は放棄に近い状態だったのか、問題が残されていると言えようが、今はまず、調査報告書を追っていくことにする。

**2007** 第8次調査では、「第7次調査と同様に第Ⅰ面、古代末から中世（平安時代後期～鎌倉時代）、第Ⅱ面、古墳時代後期から古代前半、第Ⅲ面、弥生時代から古墳時代前半の3面の調査を行った」[932集 9頁]として、大略以下のように述べている。

○「第Ⅰ面は古代末から中世後期の時期である。遺構面は地表下-0.7～-1.1 mの深さ、標高8.15～8.6 mの高さで検出した。遺構面の高さは調査区の東から南側が高く、北西側が深くなる。東から南側はもともと地形的に高かったようである。遺構の残りは南東側が不良で、主に西側から北側にかけて検出された。検出した遺構は溝状遺構、土坑、水田面、堰跡などである。北から西側には厚い洪水砂が堆積していたが、南側では砂の堆積は薄かった」[同前 13頁]。

○第Ⅱ面では「7次調査で木簡や墨書土器を出土したSD 735の南側延長を検出した。今次の範囲からは墨書土器のほか人面土器や取水口からは人形が出土した。また、SD 735内からはアーチ式に構築された堰を1箇所、確認した。畦畔や水路は北西部で砂層に覆われ良好な状態で検出された。水路SD 1061と兩岸の土堤は7次調査のSD 734の延長である。調査区南側には砂層の堆積が無く、畦畔等の水田施設は検出されなかった。（中略）第Ⅰ面より20～30 cm下げた標高7.9～8.3 mを検出面に設定した。この検出面は調査区北部に堆積する砂層上面に合わせたレベルである。砂層は厚さ10 cm程度で北西方向に向かって厚く堆積する。従って、砂層が堆積するSD 735以北では遺構面を容易に確認することができるが、以南は同レベルの黒灰色粘土層の上面近くを遺構面としたので時期や地形を同一時期のものとして捉えてはいない。おそらく南側は幾分高くなっていたものと考えられる」[同前 37頁]。ややわかりにくい記述ではあるが、要するにSD 735の北西側については、第7次調査で木簡（前述）を出土した杭列と同時期の水田面の把握に努めたということであろう。この水田面は洪水砂層に厚く覆われていたのであった。なお、SD 735は流路幅7 mを測り、所々に取水口や堰を設け、護岸杭列を備えた小河川である。この小河川から、「香」「依」「美」等の墨書土器や人面土器が出土しているので、第Ⅱ面が8～9世紀の間にあることは間違いない。

○第Ⅲ面は、明らかに本稿の対象時期より古い[同前 57・76頁]。古墳時代の遺構・遺物が殆ど見当たらないが、基本的に福岡平野では、このような河川の氾濫原の微高地には古墳時代の集落が営まれないので（立花寺B遺跡のように例外はあるが）、異とするに足らない。

以上が第8次調査の概要であり、一連の発掘調査の成果とその分析のうち、第7次調査のそれが当該地域の景観復原の鍵を握っていそうなことがわかるが、そこで提示された水田や集落の年代観には、特に奈良時代末から平安時代初期の部分に、なお追求の余地があることを指摘しておいた。ちなみに下月隈C遺跡では最後となった第9次調査は、調査事務所跡地と通水管部分の調査で、対象面積が小さいので、ここでは紹介を割愛する。

本節で通覧してきた雀居遺跡と下月隈C遺跡の報告書によれば、8世紀末頃に洪水砂で埋まった条里プランに従っていない水田面があり、その上に条里プランに則った水田畦畔が検出されていること、その畦畔から出土した土器は9世紀に降るものであること、この水田面も洪水砂によって埋

められていること、場所によっては洪水砂の上に集落が営まれるが、それは11世紀以降と考えるのが穏当であること、おおよそこういった状況が読み取れるようである。ただし、雀居遺跡や下月隈C遺跡で検出される条里プランにそった9世紀の水田面が、実際にどの程度広がっていたのかという点は、発掘調査の範囲が限られている以上明確にはできないのであり、ここに文献史料と突き合わせた検討が求められることになるのである。

## ⑤……………高子内親王家領の状況

下月隈C遺跡からさほど離れていないところに、平安初期には高子内親王・内蔵寮の所領が置かれており、観世音寺との間に相論が生じていたことは、第6次調査の報告書で山崎龍雄氏が指摘した通りである。その所領は、現在の福岡空港の滑走路の下、大まかに言えば国内線ターミナルと国際線ターミナルとの間に位置する。つまり下月隈C遺跡というよりは雀居遺跡の傍らと言った方がよい。最近、手嶋大祐氏が問題の所領について検討を加えているので、これを参照させていた<sup>(15)</sup> だきながら、所領化の経緯と所領の実相について考えてみたい。

貞観9年(868)3月26日「高子内親王家莊牒案」(『平安遺文』154号)によれば、観世音寺との間で相論になった莊田について「件の田は、去る嘉祥三年八月十七日を以て、御処分帳に載せられ、行はるるところ」とあり、また貞観10年10月12日内蔵領博太莊牒案(『平安遺文』160号)にも「此の田は、故高子内親王御処分の七十七町余の内なり」とあるので、高子内親王家は、相論になった莊田を含む77町余の田を、嘉祥3年(850)8月17日に伝領したことがわかる。高子内親王の父である仁明天皇が、嘉祥3年3月21日に崩御しているので、手嶋氏は、問題の莊田は、仁明天皇の遺領を譲られたものであるとの理解を示しておられる。蓋し卓見であろう。

問題は、そもそもなぜ問題の田地が仁明天皇の所領になったかである。「皇后宮職」木簡が下月隈C遺跡から出土していることから、古くから席田郡と皇室領とは関係があったのではないかという、下月隈遺跡第7次調査担当で当該木簡を『木簡研究』[25号、2003年]に紹介された荒牧宏行氏の説を、手嶋氏は肯定的に引いているので、あるいは、そのように想定しているのかもしれない。ただ、問題の木簡は所領経営に関わるものとは断定できず、皇室領の存在を前提としてよい<sup>(16)</sup> か疑問であろう。

むしろ、平安初期において、皇室領として設定されていたとすれば、それは勅旨田や親王賜田であ<sup>(17)</sup> った可能性が高い。勅旨田は、天皇の御領として設定された田地で、奈良時代からみられるものの9世紀に入って拡大し、天長・承和期(淳和・仁明朝)に集中してみられる。地種は殆ど空閑地<sup>(18)</sup> か荒廢地で、その面積は100町以上であることが多い。「肥前国神埼郡の空閑地六百九十町を勅旨田とせよ」(『続日本後紀』承和3年(836)10月癸亥(27日)条)という史料が残るので、西海道においても設けられたことが分かる。

勅旨田の経営は国司の所管による直接経営であり、穫稲は国衙に収納され、そこから他の調庸物や正税とともに京庫へ運輸されたと思われ、皇室私領という性格を持っていたとしても実際上の運営は公的・国家的性格を持っていた。つまり、空閑荒廢地の国家的開発の仕組みとして理解できる<sup>(19)</sup> ものである。親王賜田についても、充てられているのが荒廢田や空閑地であることから、同様の性

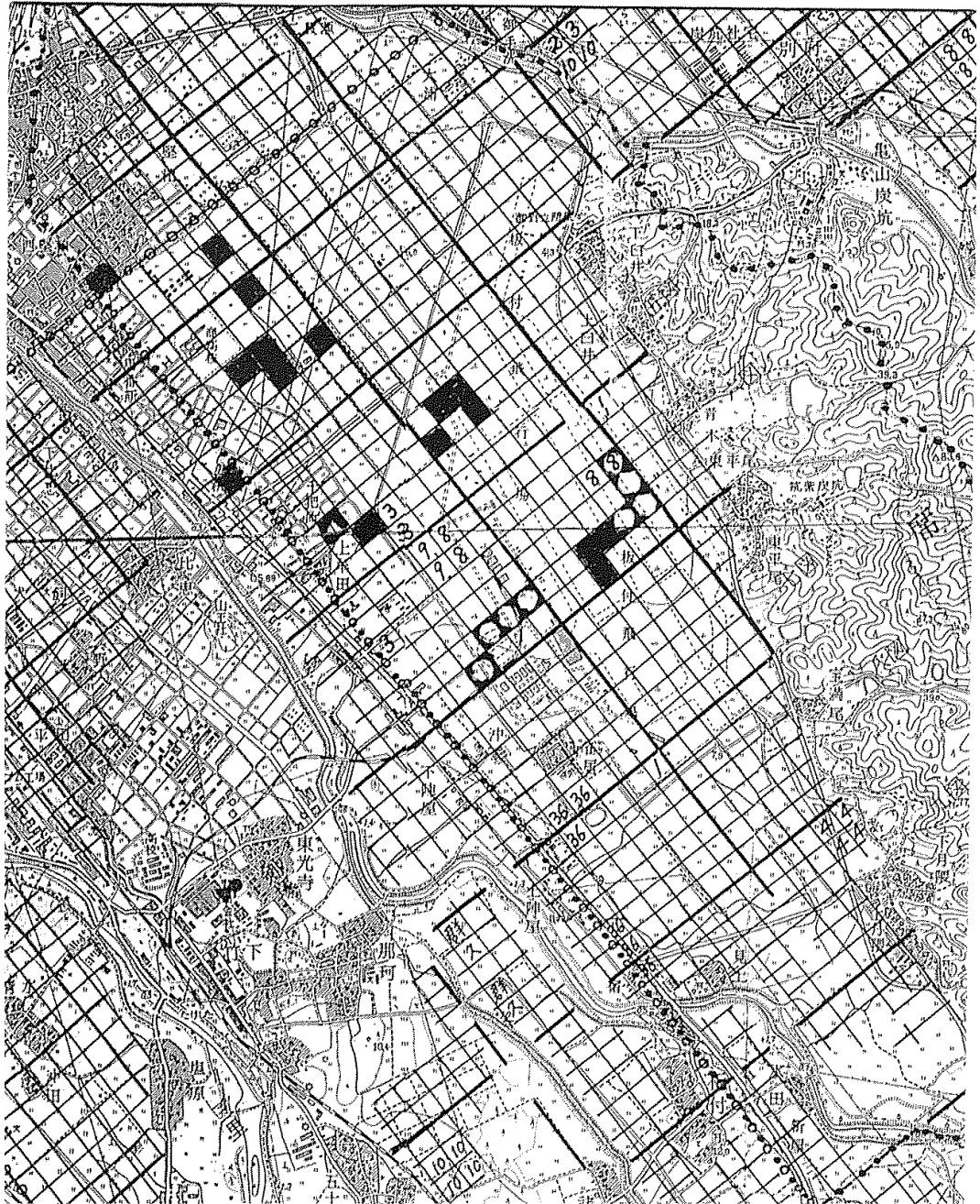


図 12 席田郡における観世音寺一切経料所の分布

黒く塗りつぶした坪は観世音寺領の所在地、○抜きは高子内親王家領との、△抜きは源冷家領との係争地。日野尚志「筑前国那珂・席田・粕屋・御笠四郡における条里について」〔『佐賀大学教育学部紀要』24号、1976年〕の付図をベースに、同「下月隈C遺跡を中心にして条里・河川について考える」〔932集『下月隈C遺跡Ⅶ』2007年〕における条・図の呼称法の変更を加味して作成。後者の〔255頁〕掲載の地図での係争地の分布の一部を改めている。

格を読み取ることができ、特に賜田を受けた親王が即位した場合に勅旨田とされたのは（『日本三代実録』仁和元年11月17日条に「帝（光孝天皇）龍潜の時畿内外国に在る水陸田の地を以て皆勅旨田とせよ。符を諸国に下知すべし」とあるのを参照）、当該所領を考える際に重要である。内親王家領が77町余にも及ぶ広大なものであるのは、勅旨田や親王賜田に由来する可能性を強く示唆するように思われるし、手嶋氏が強調された高子内親王領の経営に筑前国司が深く関与していることは、院宮王臣家領の一つとしての特徴というよりも、勅旨田に由来するからと考えた方がわかりやすい。高子内親王家領がやがて内蔵寮領になったのも、もともと皇室財源として設定されていたからだと考えれば、極めてスムーズな展開と理解できる。『続日本後紀』には筑前国での勅旨田・親王賜田設定の記事は見えないが、欠落の大きい『日本後紀』の対象とする時期に勅旨田として、あるいは正良親王（後の仁明天皇）領として賜田が設定され、親王の即位後に勅旨田とされた可能性は、かなり高いのではなかろうか。<sup>(20)</sup>

もし、高子内親王家領が勅旨田・親王賜田に由来するとすれば、その場所（先述したように雀居遺跡の傍らで、下月隈C遺跡第7次調査地点からは1.6kmほど北西にあたる）が勅旨田・親王賜田に指定されたときには、そこは荒廃していたか空閑地であったことになる。すなわち、条里プランによる地点表示を持つ高子内親王家領の存在は、そこが少なくとも数十年前には荒廃田・空閑地であり、9世紀後半の時点でも開発し尽くされていない土地である可能性が大きいのである。

問題の場所が開墾を待つ土地柄であったことは、貞観10年10月12日内蔵寮領博太莊牒案に「以今年被取七段者、以去八年百姓等令開也（今年を以て取らるる七段は、去る八年を以て百姓等開かしむるなり）」とあることから明らかである。現地は広々とした条里水田面が広がっていたわけではない。ところどころに新開田・再開発田が点在する景観だった、とみる方が実態に近いと見るべきだろう。

一方、観世音寺の主張する一切経田の由来は「件、去る延暦十一年三月十三日を以て一切経料所と為し、寺家に施入す。爾してより以降、国郡の図帳に附して寺田と注し、其の地利を以て、彼の経料に充て用ゐ、已に年序久遠なり」（貞観10年2月23日筑前国牒案。『平安遺文』157号）というものであった。席田郡に設定された一切経料所10町8段264歩の全体像は、貞観10年閏12月25日大宰府符案（『平安遺文』161号）に見えており、25の坪（高子内親王家及び源冷家に妨取されたと主張するものを含む）に、それぞれ1段から1町の所領が書き並べてある。これだけの条里の坪付を信じるならば、延暦11年（792）の段階ではすでに条里プランは設定されており、その一部は施工されていたと考えるべきだろう。

しかし、この観世音寺領は、その所在地の場所柄から考えて、雀居遺跡や下月隈C遺跡で検出された8世紀末～9世紀初頭の大規模な洪水によって大部分が埋没してしまったはずである。そもそも貞観年間にいたって高子内親王家・内蔵領と観世音寺との相論が始まるのも、一面の洪水砂に覆われてしまったために土地の帰属関係がはっきりしないままに77町余の勅旨田（実態は荒廃田）が設定されてしまい、かつ再開発が試みられたからではあるまいか。

この付近の荒廃水田の再開発の障碍として、あと二つばかり背景として考慮しなければならない事情がある。一つは、弘仁年間（810～824）の大飢饉・凶作である（『類聚三代格』巻17弘仁13年（822）3月26日官符、同巻15弘仁14年2月21日太政官謹奏）。公営田設定の契機となったこの飢饉では、

大量の死亡者口分田が生じ、これが公営田に組み込まれたことが西別府元日氏によって指摘されている。<sup>(21)</sup>飢饉・凶作そのものの原因は必ずしも明確ではないが、御笠川の大氾濫を引き起こしたような豪雨も、その一つであった可能性がある。大宰府管内の国ごとの被害状況は分からないが、大宰府のお膝元の筑前の状況から大宰府官人たちが対応策を考えただろう事は想像に難くない。さらに追い打ちをかけるように、承和5年(838)4月にも北部九州を中心とする西海道は「去歳年穀稔らず、疫癘しばしば発る」(『続日本後紀』承和5年4月甲午条)、「筑前・筑後・肥前・豊後等の五ヶ国、頻年疫に遭ひ、死亡する者半ばなり」(同庚子条)、「大宰管内諸国飢う。賑給す」(同辛丑条)という事態に陥っていた。つまり、8世紀末～9世紀初頭の洪水の堆積物の上に条里区画に沿った大規模開墾を展開する余裕は、9世紀前半の御笠川右岸には無かったと考える方が自然なのであり、そこには勅旨田・親王賜田が設定されて筑前国司も大きく関与する経営が試みられたが、これが十分に展開するには及ばず、条里制に則った大規模区画の水田面が全面的に展開するのは初期中世と言ってもよい時期にまで降ると考えるべきだろう。

考慮しなければならないもう一つの事情は、災害からの復興のシステムの劣化の可能性である。公営田の設置を求める太政官謹奏には「夫れ貧乏の民、夏月調庸等の物を作るも、食無きに迫られ、直を減じて売り失ひ、貢調の日に臨みて、更に倍価にて買ひ求む」という状況が記されている。すなわち公民は夏の端境期に食料が乏しくなると、せっかく用意した調庸物を安価で売って代価を食料購入に充てざるをえず、いざ調庸を納入する際には、あらためて高価で買い戻してこれに充てるというのである。この間にあって、夏に貧窮百姓から調庸物を安く買い取って米を高く売り、秋にあらためて調庸物を百姓に高く売りつけるのは、いわゆる富豪層、あるいはその上にいる院宮王臣家とみて良からう。つまり、公営田を考えついた大宰府官人の眼前で展開していたのは、こうした公民の階層分解であり、院宮王臣家・富豪層の跋扈であった。この状況はややもすれば国郡司による部内把握に混乱をもたらし、国郡制を通じた公民の再生産に障害をもたらしかねない。

御笠川はさほど大きな河川ではないが、それでも流域には御笠郡・席田郡・那珂郡・糟屋郡を抱える。こうした諸郡と筑前国とで流域の利害を調整しながら水利灌漑や防災、そして復興を進めなければならないわけであるが、今述べたような部内把握の混乱は、諸郡の連携による河川管理の妨げになった可能性が大きい。とすれば、以前なら管理できていた護岸や利水が管理不能となったところで大規模な洪水が発生し、そして復興しようにもそのシステムが機能不全となっていたのではないかと想像されるのである。律令制的国郡制に期待された一つの機能が、こうして崩壊に瀕していたことが、ひょっとすると集落廃絶の最も深く大きな原因なのかも知れない。

## おわりに

以上、福岡平野の中心部を貫流する御笠川左岸の低位段丘上に営まれた稠密な集落群が8世紀初頭から末まで営まれたことを確認した上で、その住人たちの生産の基盤であった可能性が高い御笠川左岸の低湿地・微高地、及び右岸の低湿地・微高地上の生産遺構や集落の展開を追い、8・9世紀の交に起こった大洪水が直接の契機となって、特に御笠川右岸の水田面が広範に埋没したことが、観世音寺領や高子内親王家領に関わる文献史料によって裏付けられ、さらに弘仁年間に起こっ

た大規模な飢饉・凶作（そのきっかけの一つに先の水害を挙げること可能だろう）が追い打ちをかけ、あわせて律令制的国郡制の機能不全が重なった結果、荒廃した田土の再開発が進まなかったのではないかと論じた。

この推論は御笠川右岸の考古学的な発掘調査の成果と矛盾するものではないと考える。発掘調査の所見は、確かに一部分において8世紀末～9世紀初頭における条里水田の造成を示していると言うことができる。しかし、それはあくまでもその証拠となる遺物の出土した周辺の状態を示すのであって、観世音寺の一切経田が設定された792年当時において、それが条里地割で表示できるほどに条里プランが設定されていたことは否定できないが、だからといって条里地割の施工された水田面が全面的に広がる景観を想定するべきではないだろう。その後の大規模な洪水によってこの時の水田面は一旦埋められ、その上に設定された勅旨田が高子内親王家、そして内蔵寮へと引き継がれる間に再開発が試みられたが、それは容易ではなかった。

御笠川左岸の低位段丘上ないし微高地上に百年近く営まれていた集落に住む人々の生活基盤が、本稿で検討した御笠川右岸の遺跡地に確かに置かれていたのか、それは直接には分からないと言わなければならない。しかし、御笠川で大洪水が発生した時には、すぐ西を並行して流れる那珂川その他の流域でも同様な災害がもたらされた可能性があり、御笠川左岸の集落が、この時にその生産基盤に大きく影響を受けた可能性は否定できないのではなかろうか。

本稿で述べたことが正鵠を射たものであるかどうかの判断は諸賢に委ねるしかないが、本稿で試みたような発掘調査の成果と文献史料の述べるところとを突き合わせる事が可能となるには、福岡市教育委員会によって営々と継続されてきた集落遺跡の丹念な調査によるところが極めて大きい。文中において、特に年代観をめぐって批判めいたことを記した部分もあるが、ご寛恕を請うとともに、その真摯な調査姿勢に、あらためて満腔の敬意を捧げたい。

付記：本稿はJSPS25370781（2013～2017年度）による研究成果の一部であり、2019年度九州史学研究会大会での公開講演「古代末期福岡における集落の変貌」（九州大学旧工学部本館、2019年10月19日）を成稿したものである。執筆に際しては、奈良文化財研究所のデータベース「全国遺跡報告総覧」より多大の恩恵を受けた。

## 註

（1）——広瀬和雄 「中世への胎動」〔『岩波講座 日本考古学 6 変化と画期』1986年〕、同「畿内の古代集落」〔『国立歴史民俗博物館研究報告』22, 1989年〕。

（2）——阿部義平 「律令期集落の復元」〔『国立歴史民俗博物館研究報告』22, 1989年〕、坂井秀弥「東日本における古代集落の展開」〔『古代地域社会の考古学』同成社、2008年。初出1996年〕。

（3）——小田和利 「製塩土器からみた律令期集落の様相」〔『九州歴史資料館研究論集』21, 1996年〕、山村信榮「9世紀の大宰管内」〔『古代文化』54巻11号、2002年〕。

（4）——拙著 『日本の歴史 5 律令国家の転換と「日

本』〔講談社学術文庫、2009年、初刊2001年〕、同「律令国家の法と社会」〔歴史学研究会・日本史研究会編『日本史講座 2 律令国家の展開』東京大学出版会、2004年〕。

（5）——拙稿 「古代・中世移行期の村落—福岡市域を中心に—」〔『宮崎考古』27号、2017年〕。

（6）——十和田火山及び白頭山の噴火火山灰を基準に土器編年を再検討し、約11,000軒の竪穴建物跡のデータベース化・年代決定を試みた2011年度～2013年度明治大学大久保忠和考古学振興基金奨励研究研究成果報告書『9～11世紀の土器編年構築と集落遺跡の特質からみた、北東北世界の実態的研究』〔北東北古代集落遺跡研究会、

2014年], 及び北東北古代集落遺跡研究会編『北奥羽の古代社会』[高志書院, 2019年]所収の諸論文, 特に約13,500軒の住居址を南半・北半, 太平洋側・日本海側に分けて分析した齋藤 淳「集落・堅穴建物動態から見た北奥古代史」を参照。

(7)——長野市の埋蔵文化財第96集『南宮遺跡Ⅱ』[長野市教育委員会, 2000年]。

(8)——奈良・平安時代に関しては, 例えば, 長野県屋代遺跡群周辺の集落の消長について寺内隆夫「信濃の古代と屋代遺跡群」[『木簡研究』20号, 1998年], 美濃の古代集落の消長について渡辺博人「美濃の集落」[新川登亀男・早川万年編『美濃国戸籍の総合的研究』所収, 東京堂出版, 2003年], が表示しており, 福岡市内の集落遺跡についても菅波正人「古代」[福岡市史編集委員会『新修福岡市史 特別編 自然と遺跡からみた福岡の歴史』福岡市, 2013年]が, 市内103ヶ所の遺跡について, 7世紀代, 7世紀後半～8世紀後半, 8世紀後半～9世紀後半, 9世紀後半～11世紀前半の四期に分けて消長を表示し, あわせて掘立柱建物と堅穴住居との区別をつけ, 集落規模とともに地図に落としている。

(9)——もちろん, 『市川市史編さん調査事業報告書 下総国戸籍 遺跡編』[市川市, 2014年]に示されている地域ごとの変遷図のように, 遺跡ごとの建物の軒数を時期ごとに表示することで, 当該集落の通時的な盛衰を示すことはできる。しかし, このようにしても発掘面積が異なるので, 集落同士の規模, あるいは密度の比較は難しい。

(10)——奈良文化財研究所編『胡桃館遺跡埋没建物部材調査報告書』[奈良文化財研究所・北秋田市教育委員会, 2008年]等参照。

(11)——中尾祐太「考古学からみた箱崎と博多湾」[『九州史学』180, 2018年], 同「考古学からみた箱崎」[九州史学研究会編『アジア遊学224 アジアのなかの博多湾と箱崎』勉誠出版, 2018年]。

(12)——田上勇一郎「中世」[福岡市史編集委員会『新

修福岡市史 特別編 自然と遺跡からみた福岡の歴史』福岡市, 2013年]。

(13)——拙稿「筑紫館の風景」[佐藤信編『史料・史跡と古代社会』吉川弘文館, 2018年], 菅波正人「鴻臚館の成立と変遷」[大宰府史跡発掘50周年記念論文集刊行会編『大宰府の研究』高志書院, 2018年]。

(14)——佐々木恵介「大宰府の管内支配変質に関する試論」[『日本古代の官司と政務』吉川弘文館, 2018年。初出1984年]。

(15)——手嶋大祐「高子内親王家の庄園経営」[『日本歴史』854号, 2019年]。

(16)——拙稿「第7次調査出土「皇后宮職」木簡について」[881集『下月隈C遺跡Ⅵ』所収, 2006年]。

(17)——吉川真司「院宮王巨家」[同編『日本の時代史5 平安京』吉川弘文館, 2002年]173頁。

(18)——宮本 救「律令制的土地制度」[『律令田制と班田図』所収, 吉川弘文館, 1998年。初出1973年]67頁。

(19)——村井康彦「延喜の荘園整理令」[『古代国家解体過程の研究』所収, 岩波書店, 1965年]228～9頁。国家的開発説に否定的で天皇御料という性格を強調する吉川真司註(17)論文も, 9世紀前半の勅旨田には空閑地・荒廢田が充てられたことは認めている[173～9頁]。

(20)——『類聚国史』巻159は, 六国史から「勅旨田」の記事を集めたものであるが, 記事の殆どは「勅旨田」という言葉が記されているものであり, 親王・内親王に対する賜田は別項目にされたようで拾われていない。賜田の設置状況については, 宮本 救註18論文71～2頁の年表を参照のこと。

(21)——西別府元日「公営田政策の背景—弘仁末期の大宰府と西海道諸国—」[田村圓澄先生古稀記念会編『東アジアと日本』歴史編, 吉川弘文館, 1987年], 同「九世紀の大宰府と国司」[下條信行・平野博之・知念勇・高良倉吉編『新版古代の日本 3九州・沖縄』角川書店, 1991年]。

(九州大学大学院人文科学研究院, 国立歴史民俗博物館共同研究員)

(2021年3月16日受付, 2021年7月27日審査終了)

## The Transformation of Eighth-Ninth Century Settlements in Fukuoka City (Abstract)

SAKAUE Yasutoshi

Ancient settlement in Kinai, the Togoku, and northern Kyushu followed different paths of development following a period of stability in the eighth century. In contrast to the Kinai area, where settlements became unstable in the ninth century, and the Togoku, where they declined in the tenth, those in northern Kyushu declined in the early ninth century. However, the cause of this decline and instability is not clear. The only way to find out the background of the decline and disappearance of the settlements is to restore the landscape of each archaeological site.

This paper is based on an exhaustive survey of excavation reports published by the Fukuoka City Board of Education. I was able to confirm that during the eighth century a dense group of settlements was built on the low terraces on the left bank of the Mikasa River, which runs through the center of the Fukuoka Plain. Next, I traced the development of paddy fields and settlements on the low wetlands and slightly elevated areas of both the left and right banks of the Mikasa River. I found that extensive burial of paddy fields as a result of the great floods that occurred from the end of the eighth century to the beginning of the ninth destroyed the production base of local residents, causing the settlements to disappear.

On the right bank of the Mikasa River existed an estate that was founded in the Enryaku year-period (782-806) and originally belonged to Kanzeonji Temple. The estate was later converted to an imperial landholding (*chokushiden*), probably because it was buried by the floods and turned into wasteland. Paddy fields here were buried in thick sand by the floods, and redevelopment was not easy. It can be seen in written records that even during the Jōgan year-period (859-877), this area's landscape was dotted with newly developed paddy fields and redeveloped fields.

In this way, it can be shown through a combination of archaeological excavations and historical documents that the major reason for the decline of ancient settlements in the central part of Fukuoka City was flood damage; the difficulty people faced in restoring the settlements can also be seen in relevant historical documents.

Key words: Ancient settlements, floods, Fukuoka Plain, *Jōri* system (system of land subdivision in ancient Japan), *Chokushiden* (rice fields belonging to the imperial family)

---